

奪われた面紗^{ヴェール}

(あるいはモンゴルファイエ風のお伽話)

ヨハン・カール・アウグスト・ムゼーウス 著

鈴木 満 訳・注・解説

(一)

ツヴェイカウの市^{まち}からほど遠^{とほ}かららず、エルツゲビルゲの山並みに名高いシユヴァーネンフェルト^(白鳥ヶ原)がある。その名の由来はシユヴァーネンタイヒ^(白鳥ヶ池)と呼ばれる小さい湖があるため。これは今日ではほとんど水も涸^かれているが、それでもまだ干上がってしまったというわけではない。この水には、ピルモントの泉^(泉注2)にもカールスバートにもスバアの鉱泉水^(泉注4)にも、その他ドイツ国内の体に良く効く泉の水のどれにも、イタリアはピサの王の湯治場^(泉注5)にも類例のない特性がある。これは真正の美の香油で、あの謎めいた人物サンテ・マールの若返り^(泉注6)の軟膏より効き目があり、五月の露より靈験いやちこ、驢馬^{せんげん}の乳とか、嬋娟^{せんげん}たる魅力^(泉注7)を維持するために発明されたボムバドール夫人風化粧水^(泉注7)などより肌を綺麗^{きれい}にしてくれ、評判の滑石香油よりすばらしい。高慢な隣人であるカールスバートの温泉はご大層な激烈さでどうどうと噴き出し、熱いアルカリ性の蒸気でこれみよがしにしゅうしゅうと名乗りを挙げ、世間す



nfern der Stadt Zwickau, im Erzgebürge, liegt

べての通風病みに
褒めそやされ
ているのに、こ
の驚異の泉は雑
木の繁みを潤し
ながら、その下
をせせらぎの音
も立てず静かに
流れ、その力と
卓効が世に知ら
れるのを恥じら
う風情で、すぐ
にまた母なる大
地の胎内にひっ
そりと身を隠す
のだった。女性
の麗しさとい
うつろいやすい



とがあるが、人の子の容貌のなかに妖精の顔形を探知することは常にありうるのである。もつと当てになる確信が欲しいところだが、もしかすると他のさまざまな目印がその代役をしてくれるかも。ドイツの乙女らの魔法のような天稟は、体つきの優美さ、眼差し、口もとの快い律動、胸の曲線、声音などに賦与されたものにせよ、相手を魅惑する機知の才、なにかの巧みな技芸に存するにせよ、祖先の妖精の遺産の一部を相続したのだと推測できるし、こういうちよいとした魔法の手業がやれない乙女などどこにあらう。だからツヴィカウの美容学院詣では、次に続く者の美しさに旗を巻かねばならない運命が差し迫っているご婦人がたの一部を激励する手段となるだけの値打ちはまああるのでは。

かの魔法の泉が白銀のせせらぎを注ぎ込む小さな湖を見晴らす、とある丘のなだらかな斜面の麓にある楽しい岩窟にベンノという敬虔な隠者が棲んでいた。この名はおのれの徳行と信心を標榜する表看板として有名なマイセンの司教から借用つかまつつたもの。そして高德との評判は守護聖人におさおさひけを取らぬ。このベンノがそもそもどういう素性なのか、それからどこの出なのか、だれにも言えなかった。随分以前に強壯な巡礼としてこの地に到来、シュヴァーネンフェルトに定住、独力でかわいらしい庵を結び、周りに小さな庭をこしらえ、そこにこのうえなく素晴らしい異国の果樹の苗木畑を作り、葡萄棚をしつらえた。また彼は、当時大層な珍味とされた甘美なメロンも栽培、訪ねてくる客たちに御馳走し、慰めたもの。その手厚いもてなしぶりと朗らかな気質、二つながらあいまって人望的。山の住民たちは、天の裁きの庭に立たな

ければならないような羽目になると何事であれ、代わって交渉に当たってくれる弁護人とばかりにこの信仰厚い隠者を頼りにしたし、こちらはまた、甲乙から正反対の頼みをもち込まれることもよくあったが、報酬として大した御布施をはずんでもらわずとも、よしよしと快諾して神様へ執り成しをしてやるのだった。それでも暮らしに必要なものには何一つ不自由しなかった。いや、天の祝福のお蔭で有り余るほど授かっていたといっただほうがよい。神の召命が敬虔なベンノを衝き動かしてかまびすしい世間からこのひそやかな庵室へと導いたのか、あの信心深いアペラールのようにエロイーズみたいな女性のせいで瞑想の生涯こそありがたい天職と心得たのか、追々分かってこようかも知れぬ。

辺境伯フリードリヒが良心の咎めを覚えながらも皇帝アルベルトとの確執を戦いで解決しようとし、シユヴァーペンの軍勢がオスターラントを荒し回っていた時代ともなると、寄る年波にベンノ法師は禿が目立って広がり、名残の髪は額際で真つ白、ひどく背中が丸まり、杖にすがつての屈み歩きがやつとで、春が来ても菜園に畝を作る力とでもはや無く、手助けし介添えしてくれる者があれば、と願っていた。けれどもこの山地で意に適う同宿の仲間を見つけないのは難しかった。齢のせいでも疑い深くまた偏屈になっていたからである。思いがけなく彼の望みが叶ったのはまったくの偶然のお蔭で、ベンノは杖柱と頼れる召使を手に入れることができた。マイセン軍はルツカ近郊の大会戦でシユヴァーベン側を打ち負かし、彼らを六十の六十倍も殲した。シユヴァーペンの軍勢はパニックに襲われ、恐怖に怯えてこういう時の合言葉、逃げられる者は逃げろ、を唱えたい。闘いのあとにまた二本の脚がしつかりくっついていているのに気づいた連中はいずれも神とあらゆる聖者様に感謝し、狩り立てられた雲雀がまやかしの撚り糸の壁を翔び越え、死の網から逃げ出すのに翼を使うようにそれを利用した。多くの兵は最寄りの森を目指して逃亡、疲労困憊して柳の木の空洞に身を隠した。ある戦友たちの一団は頭数にして七名だったが、お互い忠実に扶け合い、ばらば

らにならず、生死はともに、と誓いを立て、追撃してくる敵軍から無事に脱出するのに成功した。彼らは皆達者でしつかりしたふくら脛を持った若者だったので、ミディアン人の走り手でも追いつけなかったことだろう。けれどもさすがあまりにも長すぎるこの競争に疲れ果てたし、また夜も訪れたので、どこかに隠れようではないか、と相談した。開けた野原ではどうも安全だと思えなかった彼らは、折しも行き当たった、とあるうら寂しい村に忍び込もうと決めた。この村の男たちはマイセン勢の陣営へ軍務に服しに出払っていよう、とまことにもっともな判断をしたからである。それでも彼らは用心に用心を重ねた。この七人のつわものたちはこのうえもなく厳しくお忍びを守り、パン焼き竈(カマド)に一夜の宿を取って、自分たちの存在を一層確実に隠そうとした。さてパン焼き竈はたしかにごく寝心地のよい客用寝台とは言えまいし、ルッカの合戦の前だったら連中にしたところではこんな営舎で我慢するのは難しかったろう。パン焼き竈一つに押し込まれた七人の兵隊より、同じ樽の千びきの塩漬け鯁(にしん)の方がずっと安らかに睡れるものね。しかし今回は切羽詰まったの宿営、くたびれが、お互い仲良くしろ、と言ひ、眠気が、ぐずぐず抜かすな、と命じたわけ。一人また一人と両の目を閉ざし、この悲運の仲間たちは、夜明けにはこっそり静かに撤収しようや、と約束をしたのに、日が高く昇るまで白河夜船でいた。

けれども七人の眠れる男が目を覚まさぬうちに、彼らは一人の百姓女に見咎められていたのである。この女、味方は勝ち戦との噂が田舎にまで聞こえて来たので、この報せに大喜びして菓子(菓子)の材料を捏ね混ぜ、うんとこさ早くに焼いてしまおうと思ひ、竈まで来て、泊まり客に気づいた。引きちぎれた胴着やズボンで、この見知らぬ客人たちが落ち武者だと気づいた彼女は、急いで村に馳せ帰り、隣近所の女たちにこの由を告げた。たちまち農婦たちが、焼き串やら火掻棒やらで武装、群れをなして集まる。そのさまは、五月朔日箒にうちまたがつて、プロッケン山へとおもむく風情にさも似たり。パン焼き竈は女人の部隊により本格的に包囲され、敵勢を武器で攻撃するか、それとも火攻め



にするか、作戦会議が開かれた。というのも、この国へ侵入した折り、修道院の神聖さも、貞潔な主婦やその娘たちの美徳も露憚らなかつた非道な押し掛け婚どもから蒙つた、乙女らや大人の女たちの屈辱を雪ぐことは既定の方針だつたからだ。七人の犠牲者たちはもしかすると自分たちの同国人が犯した悪行に責任が無かつたかも知れないが、それでも女たちにその負い目を償わねばならなかつた。貞潔委員会は協議の結果、この男どもを残らず焼き串の刑に処すると判決。既に村の女たちは復讐の精神に駆られて手にしたこの異様な武器をふりかざしていた。酒神の祭儀の狂

気がダイアーデン（パッコスの巫女たち）の携える重いティルスス（木蔦と葡萄の葉を巻き付けたパッコスの杖）を振るわせるのと同じ。群衆は、客人権を冒すべからずなどということは一顧だにせず、気をそらえて兵士たちの宿営に突入、無防備な男どもは激しく殴られるは、火掻き棒で突かれるは、で熟睡からまことに乱暴に叩き起こされる。かくも不親切な朝の挨拶に危険を察知した彼らは、大きな悲鳴を挙げ、竈のなかから降参と叫び、命ばかりはとじさりに嘆願した。けれども情け容赦のない女战士们は息つく暇もあたえず、いとも巧みに外からこの虐殺の穴蔵に得物を突き刺したので、とうとう完全な死の静寂が内部を支配、不幸な兵士仲間のうち手

足をびくりとでも動かす者はもはやだれ一人おらぬ。事が済むと女たちは扉に外から錠を掛け、勝鬨かつごうを挙げながら村を練り歩いた。(原注3)

盟約を交わした仲間のうち六人は、たしかにこの竈のこぜりあいでの場を去らず討ち死にしたが、他の連中より利口だったか、それとも性根が座っていたかした七人目は、危機迫ると見て取るなり、もつと着実な救いの手段をみつけた。彼は賢明にも刻ときを移さず煙道の中に退却をおこない、これを攀よじ登つて見咎められずにおぞましい牢獄から抜け出し、屋根から滑り下りると村はずれにたどりつき、ありつたけの力で近くの繁みに走つて行き、絶え間ない死の恐怖に怯えながら終日さまよい歩き、とうとう日が暮れてしまった。疲れとひもじさのあまり一本の野の樹の下にぱったり倒れ伏したが、夕方の冷気に正気を取り戻し、目を開けると、ほど遠からぬところで一人の敬虔な隠者が、木の皮で結び付けただけのごく素朴な十字架の前に、祈りを捧げているのを見た。このありがたい光景に元気づけられた彼は、慎ましやかに距離を置いて高德な修道士に近づき、その背後にひざまずいた。僧は祈禱を済ませてしまふと、この見知らぬ若者に祝福をあたえた。けれども相手は蒼白で血相を変えているのを見、またその風体から戦場様ラシツクぎの傭兵ネヒトか騎士の盾持ちだろうと判断、とつくり話を始めた。誠実なシュヴァーベン人は、告解をしているかのように一切包み隠しをせず、おのれの凶運を坊様に打ち明けた。死への恐怖も秘めてはおかなかつた。なにせ彼は、焼き串の形をした大鎌で武装した死に神が自分のうしろに迫っていて、今にも追いつくだろう、と怯えつばなしだったのでね。善良な隠者は、罪の無いシュヴァーベン兵の血が流されたことを悼み、若者に庵での庇護と夜の宿りを提供した。もつともびくびくした落人おちひとは錯乱した幻想に脅かされ、足を一步踏み入れるなり、暗い洞窟が虐殺の穴蔵あなくらみだに見えた。この岩の天井ばかりか、礼拝堂も、食堂も、隠者の地下蔵も、いやそれどころか天の蒼穹そうきゆうでさえ、彼の目にはパン焼き竈の形さながら。彼は次々と死の戦慄に襲われた。しかし親切な老人は彼を励ましてすぐに気を取



り直させ、洗足すすぎの水をあたえ、上等なパンと菜園のいくつかの果物を夕餉ゆうげの食卓に並べ、上顎うわあごにへばりついた彼の乾いた舌を一杯の葡萄酒で爽やかにし、それから乾いた苔でできた寝床を用意してやった。シユヴァーベン人フリート

ベルトは、敬虔なベンノに朝の祈りへと起こされるまで、ぐっすり眠りこけた。それから朝食となると、彼は苦しさで心痛をことごとく忘れ果て、優しい主あなごの慈愛に満ちたものでなしと世話にどう感謝してよいか言葉もなかった。三日後彼には時間がどんどん経っていくように思われた。でも嵐の折り穏やかな入り江に投錨した船乗りが、外洋でまだ風が吠え猛り、怒濤いかたけが轟々とさかまいているのに、思い切って沖に出てみようという気には到底ならないのと同様、この安穩な生活をあとにしたいとは考えもせぬ。ベンノの方もこの誠実なシユヴァーベン人が素朴で実直な気質で、真心溢れ、仕事熱心なのを見て取ったので、これからもずっと傍に置いておきたいと思う。こう気持ち一致すれば、二人が約束を決めるのも簡単。フリートベルトは師父ししに剃髪しんぱつをしてもらい、軍服を隠者の衣に替え、助修士として庵室いんしつにとどまり、恩人の身の回りの世話をし、厨くわと菜園を切り回し、この隠遁所に詣でる巡礼たちの接待にあたることになった。春が夏に別れを告

ける夏至のころ、太陽が蟹座に入ると、ペンノは忠実な召使を池に行かせて、白鳥が水面に来てゐるか、飛んでゐるのが見られるか、そしてその数はどれほどか、検分させるのを決してなおざりにしなかつた。彼はいつもこの報告に入念に耳を傾ける様子で、白鳥が訪れてゐると上機嫌になるのだが、いつもの時期になつても一羽も姿が見えないと聞くと、老人は頭を振り、数日の間憂鬱そうに洗面を作つてゐるのだつた。素直なシユヴァーベン男は、だからいつて気も悪くせず、くよくよ悩む師父の奇妙な好奇心をそれ以上詮索もしないか、白鳥が渡来する・しないが、その年の豊作・不作の前兆なのだろう、と思つたりしたもの。

(一)

ある日フリートベルトが隠れて張り番をしてゐると、黄昏なまがれ時に何羽かの白鳥が池の上へと飛んで来るのが見えたので、いつものようにこのことをペンノ神父に報告した。すると師父は大層喜び、美味うまいい夕食を拵もておくれ、と言ひ、葡萄酒もたっぷり出させた。いともめでたい杯は食卓についた朗らかな二人にすぐ活き活きした力を發揮、年老いた僧は日頃のしかつめらしさをさらりと振り捨て、話好きで剽じゆう軽きんになり、葡萄の汁や恋の成就じゆうについてしきりとお喋りをしたので、もしこれを聞いた者がいたら、テヨスの老人がよみがえつて隠者かくしやに变身へんしんしたのでは、と推量すいりやうしたことだろう。それどころか神父はあの古代ギリシャの酒の唄「恋と酒、なくはこの世をいかにせむ」を歌ひ始めた。葡萄が搾られ、乙女が愛されるようになって以来、だれにもお馴染みで、ヴァイセ御大おんたいが同時代人どうじだいにんにまた歌えるようにしてくれた、あれである。養子になみなみと注いだ杯を渡し、相手が几帳面に返杯すると、彼は悲しげにこう口を切つた。

「せがれよ、おまえの胸に問うことがあるが、それに答えてほしい。したが、悪巧みをせぬよう、あるいは、おまえ自身を欺かぬよう、心にしかと命じてくれい。また、でたらめな言葉が転げださぬよう、おまえの舌も抑えてな。

というのも、おまえがまやかしを語ったと分かれば、その嘘は、ロシア人の籠に掛かる鍋のように、おまえの舌を黒く染めるだろうからの。さらばあからさまに偽りなく言ってくれ。これまでに女人への愛がおまえの心に芽生えたことがあるか、あの甘い恋の衝動が目覚めたことがあるかをな。それともあの優しい情けを感じる気持ちはおまえの魂のなかでまだ眠っているのだろうか。おまえは情熱の蜜の杯をおずおずと味わって見たのか。それともすでに欲望の大杯をぐつと飲み干してしまつたか。もしかすると幾つものひそやかな恋の火を希望の油で育んで絶やさぬようにしている程度かも知れぬな。あるいはもうそれも皆移り気という風に冷やされ、消され終わつたか。それとも嫉妬という灰の下で隠れた火種が赤く光つていようか。おまえの瞳にうちこんだどこぞの女子がおまえを想つて溜め息を漏らし、死んだかと嘆きの涙を流しているかな。それとも故郷でじりじりと恋い焦がれながらおまえの帰りをひたすら待ちわびているのやら。おまえの心の秘密を私に打ち明けてくれ。さすればこちらも虚心坦懐におまえに是非聞いてもらいたいことを語るつもりだ」。

「尊師様」と朴直なシュヴァーベン人は答えた。「私の心につきましては、まだ恋の轡を負うたことはありませんぬ。鳥刺しの網にかかったことのない空の鳥のようにまだ自由でございます。私は頸の産毛がカールして一人前の男の縮れ髭になり、女たちが私に注意を向けるようになる前——と申しますのも、嘴の黄色いうちは女連には高く買つてもらえないからですが、——、ごく若いころに皇帝アルベルトの軍旗のもとに徴兵され、槍を担ぐ身になりましたので。その上、私、恋の道には引つ込み思案な性分なのでございます。色目を使いたくありません。綺麗な女の瞳を大胆に見つめる勇氣はありません。それにだれかが私の恋に應えて、素振りなり目つきなりで誘いを掛けてくれるようなことも一度もありませんでした。そういうわけで、私のために女子が涙を流したことは存じませぬ。軍隊に参りますので、母と姉妹たちが泣いたのは別ですが」。老人はそう聞いて喜び、こよう言葉を続けた。



「おまえはこれで三年というものの私の世話をしてくれた。実直なしちつ僕
 さながらの仕事じゃ。おまえはそれ相当の報酬をもらう値打ちがある。
 私は、それをおまえが愛の手から受けられればよい、と思っている。
 幸運が私とは違っておまえをいつくしんでくれればだが。実は、私
 が遠国かんこくからはるばるとこの草庵へやって来たのは、神様への信心から
 ではのうて、恋のせいなのじゃ。私の身の上話とあの池にまつわる物
 語を聞くがよい。この月の冴えわたる宵には白銀の海のようにわた
 ちの目の前に広がるかしこの池のことをな。

青年時代私は血気盛んな凛々しい騎士だった。代々ヘルヴェチアに
 住まい、キブルクの伯爵（実注4）の一族の出なのだ。慰みごとと恋の戯れにう
 きみややつしていた私は、あるとき一人の坊主めを殺してしまった。

こやつ、詐欺瞞着で私からある美しい乙女を奪い、彼女は私を袖にし
 たのだ。そこで私はこの殺人について法王様の贖宥しよゆうを戴こうとロー
 マへでかけた。法王様は、三度十字軍に参加して聖地へおもむき、サラセン人と闘うという贖罪を課された。それも、
 故郷へ生還しなければ所領はすべて聖なる教会のものになる、との条件でな。私はヴェネチアの漕権船ガレの一艘に乗務
 して、意気揚々と船出した。しかしイオニア海で陰険なアフリカ人風がこの船の帆を吹きまくり、海はさかまき、わ
 が扁舟は怒濤に弄ばれ、エーゲ海のナクスス島の近くで暗礁に乗り上げ、木っ端微塵になってしまった。私は泳ぐ術すべ
 を心得ていなかったが、幸い守護天使がしっかりとつかまえて水に浮かばせてくれたので、陸地にたどりつくことがで

きた。海岸の住民が親切に私を引き揚げ、呑み込んだ海水から回復するまでなにくれとなく面倒を見てくれた。それから私はキサにあるゼノ殿の宮廷を目指した。この仁はマルコ・サヌートの末裔の一人で、シユヴァーベン家の皇帝ハインリヒがキクラデス諸島を公爵領として授けたのだ。私はさる異国の騎士の名を名乗り、温かく迎え入れられた。

この地で私はゼノの奥方であるたおやかなゾエに出会ったのだ。このうえなく美しいギリシヤ的均衡の持ち主で、あのアペレスが知つていれば、彼女を愛の女神のモデルに選んだことだろう。その姿を目にしたとたん、私の心にはつと火が点いた。この情炎のなかで他の考えや願望はすべて一緒に燃え上がってしまった。十字軍士として聖地におもむくという誓いも忘却、ひたすら肝胆を砕いて思い詰めたのは、若き公妃にこの身の恋を打ち明けたい、ただそれだけ。槍試合のたびに私は衆人よりぬきんでた。柔弱なギリシヤ人のこと、力量でも敏捷さでも私に比肩する者はおらなかつたのでな。女心を我ら男が手に入れるのをたやすくしてくれる無数の小さな心遣いを示して、魅惑のゾエに取り入るのを私はおさおさ怠らなかつた。彼女が宮中の祝祭にどんな服装をするか、諜者らを使って入念に調べたので、ゾエの衣装の色がいつも私の鎧の綬と兜の覆い布の色だった。あの女は唄と弦楽、それから陽気な輪舞が大好きで、自分でもヘロディアスの娘のように踊って有頂天になつたもの、彼女が夕さり晴朗なギリシヤの空の下、海に面した花園のテラスを逍遙し、浜辺の銀の漣が仲の良い者同士の親しいささめごとのようにざわめくたびに、小夜曲をかなでて奥方の不意をついたことも再々。彼女を娯ませようとモレアからいくつも踊り子の一座を呼び寄せたこともある。コンスタンティノポリスの小間物売り女たちと取引をしたことも少なくない。して、あの帝都の最新流行に添って工夫された婦人装飾品をいの一に番に手に入れ、それをさまざまな手だてを尽くしてわが心の君に届けさせたのだ。もつともこうした慇懃な心入れを手配したのはだれか、彼女に容易に推量できるようにしてだが。

おまえが恋の道に多少の経験があれば、せがれや、見かけはどうということのないこうした好意の数々は、雅びの



道での神聖文字ヒエログリフであることが分かるだろうがな。この神聖文字は門外漢には児童に属するたわごとに過ぎないが、ありきたりの言語の文字や単語とまったく同様きまった意味も含みも持っているのだ。つまり、こうしたものは一種の隠語でな、これに通じている二人は、第三者が居合わせても、何を言われているのやらこれに知られることなく、語り合うことができるというわけだ。相愛の者同士は、手引きや説明の要らない言葉をとごとく心得ている。私が宮中深くに送り込んだ口の利けない品物は、そこで大声をはりあげて、こちらの鼻屑ひいきをしてくれたわけだ。宮廷人が押し合いへし合いするなか、奥方の美しい目が私の姿を探し出して、恍惚としたものだ。そこで私は自分の計画をますます大胆に押し進めるようになり、彼女の侍女のなかに、報酬と引換えに恋の使いを務めてくれる腹心の者を見つけた。やがてかたみに愛の告白。そして二人きりでの密会が何度も約束された。けれどもいつも果たせなかった。恋が引いた設計図をちよつとした事情が台無しにするのだ。ここに、と公妃が指図してきた地点に彼女が見つからなかったり、逢おうと言われた所が私には近寄れない場所だったり、でな。あの麗しいギリシャ婦人は嫉妬という魔物に至極嚴重に監視されていたので、彼女の姿を見ることは全宮廷の目の前でしか私には叶わなかった。鉄壁のようなこうしたさまざまの障害に私の希望は砕け散ったが、食べ物が見つからねば見つからぬほどがつがつとなる飢えた狼のように、私の情熱はいや増した。情炎は私の骨髓を貪り、両の頬は

蒼褪め、腰は痩せ衰え、歩行もおぼつかなくなつた。なにせ、風にそよぐ頼り無い葦のように膝ががくがくしたのだ。こうした辛い状態になつたにも関わらず、沈黙を守ってくれる胸に私の苦悩をぶちまけることのできるような、せめて徒な希望でなりと宥め賺して私の衰えた精神を奮い立ててくれるような、信実な友が私にはいなかったのだ。こうして宿所で病褥に伏し、消耗しきってしまったとき、公爵は、回復するよう尽力せよ、と命じて、侍医のテオフラトスに私を見舞わせた。脈を取りたいだろう、と私が片手を差し出すと、医師は、私がいらいらと神経を立てているのを気にも留めず、親しげに微笑んでそれを握り、こう言った。

『騎士様、運を天にまかせて療治をつかまつるそんなじよそこらの藪医者どもの流儀で、膏藥やら塗り薬やらを用いてそなたをお治し申しに、やつがれが参上したなどと、ご推量あそばすな。ご健康が飛び去つたのは恋の翼に乗つたがため。元に戻るには同じ翼でなければなりません。』

テオフラトス師が、まるで解剖刀で私の心臓を切り裂いたかのように、そして供犠の司祭がそれを検分して予言するように、私の心の秘密にこうも詳しく通じているのに、ひどくたまげた私は、彼が先刻承知のことは何一つ包み隠さず、ふさぎこんで更にこう付け加えた。

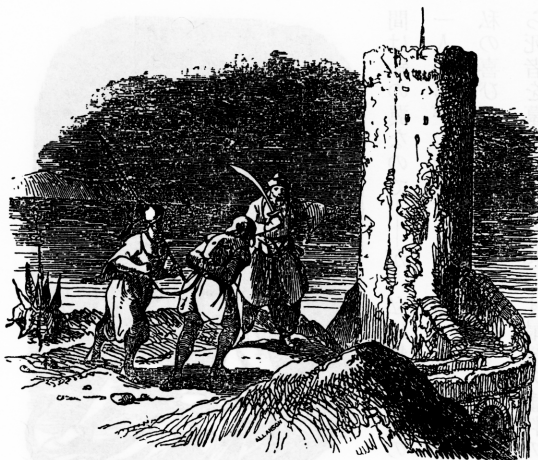
『もはや結び目が堅くて解けないまましめで私を陰険に縛りつけてしまったこの恋の病をどうして癒せると望めましょう。我が運命に従い、このまやかしの輪縄でくびれ死ぬほかいしたしかたありません。』

『決してさようなことは』と彼はこたえた。『もとより成就の当てのない恋は死よりも辛いもの。したが、だからというて希望を失つてはいけません。天日の下新しきこと無し。かつて有つたことは、またございませうぞ。痩せつぱちのタイトノスはアフロディテの褥で眠ることにならうとは夢にも思ひませなんだが、やがて女神の腕に抱かれてひどく可愛がられたので、とうとう彼の脂身では蟋蟀一匹作るのにやっこさとなりました。イダ山の上で笛を吹



いて枯れ草で羊を飼っていたあの牧童は、のんびり屋のメネラウスからスパルタの麗人を奪い取り、愛の獲物としてかどわかす羽目になるなど露思いもしませんでした。(訳注14)
 アンキセスの殿にしましても、そなたに比べどこが優っておりましたかな。それなのに彼は雄々しい戦神を尻目に天界の女神たちのうち最も美しいお方に報奨を受けたのですぞ。彼女の場合、命に定めある人の子の戦士風情の方が不死の将師を凌いだわけです。

こう哲学的考察を開陳して医者私の胸から苦悩を追い出してしまった。彼の口から流れ出る言葉は耳に快く、薬剤師の薬種箱にある物よりもずっと香気高く、薬効があるように思われた。床払いをするとすぐ私は前からの企てに戻ったが、今度は運勢も好転したかのよう。医師テオフラトスは私の親友、私の恋の腹心にして仲介者となった。麗しのゾエは番人たちの警護の目をかすめ、私は以前のさまざま困難の鉄壁を易々と乗り越えるのに成功した。そして彼女の林苑の素馨に覆われた東亭で二人きりで語らい合うというあれほど長いこと焦がれていた機会にめぐりあったのだ。私の憧れの的をこんなにも身近にして感じた歓喜は、この世のすべての感覚を圧倒する陶醉を私の魂に注ぎ込んだ。私は恋に酔い痴れてゾエの脚元にひざまずき、その白鳥のように真つ白な手をひしと握りしめ、無言の熱情を籠めて唇に押しつけた。愛を吐露しようと全霊を挙げながら。しかし狡猾な大守はかねてから私の一挙一動を監視、もう長いことバジリスクの卵(悪意・害心)を温めていたのであり、奸策をめぐらして仕掛けた罠に私を誘い込んだのだ。親衛兵の一群が埋伏所から躍り出て、庇おうとおずおずと拡げた麗しのゾエの腕から荒々しく私の体をもぎ放した。恐



ろしい不意打ちの驚愕が武器の騒音で彼女の五官を奪い、動物精気は雲散霧消、頬の蔷薇色は蒼白となり、一声あゝと溜め息をつくくと、彼女は氣を失つて長椅子にくずおれた。

海原にぐるりを囲まれたごこしい岩山の上に堅固な塔がある。島から石を投げれば届く距離に過ぎないが、見張りが配置されている跳ね橋でしか行き来できない。異教の時代ここには喜びが住んでいた。この廢墟はかつて名高い神殿で、喜びを頒かつ者であるパツコスが祀られていたのだ。(原注)この嫌悪すべき異教の寺院を愛の教えキリスト教は飢餓の塔に変えてしまったというわけ。住まうのは泣き叫ぶ声と齒咬みである。暴君の怒りの不幸な生贄はどこでどうし

ようもなく滅亡していくのだ。私は、この慄然たる地下牢の中へ果てし無い梯子を伝つて下りるように、と強いられた。この梯子は私の足が奈落の底に触れるやいなや再び引き揚げられてしまった。この死の獄(原注)に垂れ込めているのはエジプトの暗黒で、死人の臭気が私の五官を朦朧とさせた。私は自分が黄泉の国の入口にいることをすぐに悟った。死の臥床となる場所を捜していたとき、脚の骨や半ば朽ちた死骸につまづいたからだ。絶望で張り裂けそうになって固い鋪石の上に横たわり、生きる苦しみから早く開放してくれ、と死に呼びかけた。しかしこのたび死が送つてよこしたのは彼の弟の睡眠で、これは束の間ながら私に悲嘆を忘れさせてくれた。目を覚ますとびっくりしたことに穴の中にぼうっと明かりが射している。何だろうとしげしげ見ると、死者の部屋(原注)の中央に燃えている吊りランプがあるではないか。これは上から一筋の紐でぶらさ



げている把手付きの籠に載っていた。籠の中を調べると、何本かのヒエラ産葡萄酒(註)に添えてくさぐさの食べ物が盛られている。そして灯火を保つ油の壺も一つ。ランプのせいでこの恐怖の囚獄のおぞましい物がすべて見えるようになったが、食いが吐き気に勝ちを占めた。私は急いで幾本かの脚の骨を寄せ集め、それで食卓と椅子まがいの物を作り、籠を前に座り込み、朝飯前に墓を掘ってしまった墓掘人のように食事をしたためた。

間は鉛の翼なので——が、私は無数の段のある例の梯子が上からぎしぎしと降ろされる音を耳にした。それを伝って一人の男がつつと下りて来る。私は哀れな囚人仲間か、刑吏かだと考えた。それが医師のテオフラトスだと気づいて私の喜びは驚きと同じ大きさになった。彼の声音はこの死の納骨堂の中でえもいわれず快く私の耳に響いた。さながら死者を墓穴から呼び起こす最後の審判の喇叭(トランペット)の調べのように。友テオフラトスは私を心から抱き締め、自分のあとについて来るように、と言いながら、使いのおもむきを語って聞かせた。彼の物の言い方はすこぶる簡潔で、下にはぐすくすしていなかった。この地獄の奈落の息の詰まるような空気が気に喰わなかったからだ。察するに、この獅子の洞穴から再び抜け出すことができたのは初めてだったらしい。わが善天使の先導で彼の住まいにたどりついた私に、医師はこの不可解な釈放の秘密を打ち明けてくれた。

『このたび不名誉な飢え死にから免れなされたのを、そなたの運勢と愛の力に感謝なさることですな』と彼は言った。『この剣呑千万な迷宮の出口が閉ざされぬうちに、急いでキクラデス諸島の魔法の圏(カ)からお逃げなされ。焼き餅

やきのお殿様というのはアルクスやブリアレウス以上です。^(訳注)そなたを見張る百の眼と、そなたを捉える百の腕を持つておりませぬ。ゼノはこのうえもなく奥方を愛している夫ですが、このうえもなく復讐心の強い敵でござる。あの御仁の血管には虎の血が流れています。けれども愛の手枷足枷がかつとなる氣質を縛っておりませぬ。愛神の悪さの仕返しを麗しのゾエの親衛騎士には酷しゅうなさるが、奥方自身には決して手を触れませぬ。そなたは本来なら塔の中のそなたの先行者たちと同じ成り行きになるところでしたのじゃ。もし公妃様が、あの方のために苦しみ抜き、飢え死にした他の人たちよりずっとそなたのことを想っておられなかつたらう。あの方はご自分の無実とそなたの徳性を火の神明裁判で証したい、とかきくどかれ、死の獄からそなたを釈放して欲しい、と大胆にも要求なさつたのです。お殿様がこの当然の請願を見下した調子で拒むと、あの方は悲しげな素振りでご御前から退がり、厳かな誓いを立てて、今後一切食事には口をつけぬ、と宣言なさつた。騎士殿、あなた様と同じく飢え死にしようとな。情の剛い旦那様がさして気にもなさらず、狩りにおでかけになると、彼女はご不在を利用して塔の見張りを買収、食べ物その他必要な品をあなた様に差し入れました。ただし奥方ご自身は誓言を守り、飲食をお断ちじやつたが、三日後お殿様にはこういうご注進が参つた。奥方様の薔薇の頬を黄褐色の萎黄病が蝕み、この世ならずすばらしいお目の命の炬火は消え始めております、とな。これにはお殿様も心を煩わせ、悔い改めて奥方の脚元に馳せつけ、そなたの美しさを台無しにし、この世と訣別するという決心を翻してくれ、と懇請なさり、あなた様の命を救つて欲しいとの願いを認める、とおっしゃつた。ただし、そなたがナクススから出立することが条件。始祖アダムが二度と戻ることなく楽園をあとにしたようにな。お殿様は麗しのゾエの介抱をやつがれに命じられ、彼女にそなたの釈放を指示なさつた。ですから早急に退去なさる準備をなされるがよい。ヘレスポントス行ききの船がすでに停泊しております。これが確實にそなたを大陸へ運んで行つてくれましようぞ」。

医師が話し終えると、私はこの誠実な男を抱き締め、救い出してくれたことを懇ろに感謝した。しかしナクソスを離れねばならぬことが心に重くのしかかった。麗しのゾエと別れるくらいなら、命におさらばする方が簡単だと思えるほど、彼女の魅力に絡めとられていたのだ。

『友よ』と私は言った。『あなたの最後のお言葉は私には死の宣告に等しい。成就の当での無い恋は死よりも辛い、とはあなたご自身が教えてくれたことではないか。あの飢餓の塔で私が衰え死ぬままに放っておいてくれたら、この悲惨な人生から開放されたものを。私の恋を永久に諦めよ、と言われた今、人生は苦しみですからね。騎士らしく正々堂々と死なせて頂きたい。殿にこうはつきり申し上げてください。私は麗しのゾエをわが心の君に選びました。それを生死を賭けた騎士の闘いで喜んで証明いたします。と。しかしながらあの方を報奨として賜うことは決して叶わぬことゆえ、打ち物取つての闘いで斃れるまで殿の騎士団を向こうに回して、彼女のために闘い抜く所存。そういったせばあの方は私のために人知れず一掬の優しい涙を手向けてくださろう』。

友テオフラトスは頭を厳かに振り、高熱に脳を浮かされている病人に医者がするように、そっと微笑みかけて、こうこたえた。

『お考えは愚かなこと。勇敢な騎士というものは負かされるために闘うものではござらぬ。打ち勝つこと、そしてそれによって榮譽名声を獲得することが肝要です。そのうえ、お殿様はお申し出の決闘を騎士道の掟ではなく、嫉妬の定めで裁き、遅滞無くそなたをまたあの黄泉の国の門口に送り込まれる、とかようにやつがれには思われます。したが、愛は死よりも強く、お見受けしたところ、ご情熱がご分別を打ち負かし、それゆえ何物もそなたを麗しのゾエから引き離せないわけですから、希望という命の露の一雫をもう一度お胸に注いであげましょう。これはお治しする役には立たんが、元気づけにはなりません。ごく僅かの賢人にしか知られておらぬある秘密をお聞きなされ。

友情とご境遇への同情が沈黙の封印を切るのではなく、金銀財宝を積まれてもお話し申すことはなからうが。お慕いなさるゾエは、わがギリシャの麗人にはまあることながら、また、すべての民草の美女でもそうだが、妖精族の出でござってな、死すべき定めの子の血は半ばしか混じっておらぬ。かつてギリシャに神々の一党が住んでいたという古い言い伝えは絵空事ではない。詩人たちが作り話やでたらめを混ぜたので、真実と偽りを分かつかつのが難しくなつてしまつたが。アンチモニ―と一緒に鉍滓こうざいになつた純銀のように。とは言え銀は鉍滓に含まれており、分かる者には分かる道理。この神々の一族というのは天空の大氣の精に他ならぬ。氣圈の上層、つまりオリュンポスに住まうておりますな。彼らは上天に向かつてぴんと張られた被造物の連鎖の中で、人類にすがりついている次の環わなのであるのじゃ。昔むかしは人間と和合し、目に見える交わりを結び、アダムの子ら（人間）と通婚しておつた。そこで今日に至るまで彼らの末裔がこの下界に残つております。レダがのんきに独りで沐浴していたとき不意を襲つたあの悪戯者の白鳥、あれはあとで美化された雷神ゼウスを装いましたが、まさにこうした精靈なのです。彼は女系の子孫に婚資として、ある状況にあつては、そしてある目的のためには、その父祖の白鳥の姿を真似ることができるといふ能力を受けました。既知の三つの大陸には我らが母なる大地の胎内から三つの小さい泉が湧き出しておるのですが、これは大氣の精たちが中につかつて涼むのに役立っています。と同時に泉には、我々が妖精なる名で識つており、古人が天界の女神がたとして崇拜していた氣圈上層に住む魅惑的な女性らに、若やかな姿形と美貌を保つ特性が賦与されています。これらの泉は、精靈か妖精の血を引くすべての人間の美女にもこうした力と効能を發揮いたします。年に一度夏至の時期にそこで水浴びをすればな。しかしこれらの泉は遠隔の地にあり、翔ぶ翼をあたえられているのは母レダの白鳥一族のひこばえである妖精界の貴族の子孫だけです。遺産を享受することができるのはごく僅か、大部分はアダムの娘らのありきたりの運命に従い、いずれ散る花として萎れてしまうのです。

騎士様、そなたは不思議なことと思われましようが、麗しのゾエの家系図がレダの卵にまで溯ることは確かです。(実注3)
 そのごく疑いない証拠は、あの方が毎歳一度白鳥になる、あるいはあの方のいつもの言いぐさを借りれば、白鳥の衣を纏うことです。というのはレダの子孫の女性たちは普通の人間の赤子のように裸でこの世に生まれ出るのでなく、その柔らかな体を、凝縮させた大氣の光線で織った軽羅ウチロで覆っており、これは成長の度合いに応じて伸びるのです。衣は地上に棲む人間の体の重さを無くし、軽々と雲の果てまで持ち上げてくれる純粹きわまる火の性質をことごとく備えているばかりか、それを纏っている限り、持ち主に白鳥の姿を分かち授けてくれます。美の泉への毎年の旅は九日間かかります。この巡礼が阻まれたり、中止されたりしなければ、あの方は、美と若さをいつまでも享受する、という普通は叶えられない宿望を女性の虚栄に叶えてやれるというわけでございます。

このナクソスではそなたから聞き難い恋の告白を麗しのゾエになさるため、遠路を行き、こうした不思議な泉の一つのほとりで待ち受けるのがお厭でなくば、どこで泉を捜さねばならぬか、お教えいたしましょう。第一の湧泉はアフリカの奥地のアビニシア国にあり、ナイルの流れの有名な源から成り立っております。二番目はアジアなるアララト山の麓の底無し無底の池。これはあの葡萄酒の發明者の大洪水を吸い込み申した。そして三つ目はヨーロッパのゲルマニアの地に湧きだしております。ズデーテンの山並みが西の平野へ向かつて突き出している所にな。水は溜まって、土地の住民がシュヴァーアーネンフェルトと呼ぶ優美な谷にある池となっております。この池こそ麗しのゾエが最も頻繁に訪れる場所。なにせ一番近いので。魔法の白鳥は自然の白鳥と違って頭に羽毛冠があるので、区別するのはそなたにも難しくはありませんまい。昇る陽の光が水面に触れる前の朝まだきか、残光が西の空をまだ赤く染めている日の暮れ方に待ち伏せして、白鳥たちが飛来するかどうか見張りをなされい。そして鳥たちが水面か葦の繁みに降りるのに気づかれたら、その後まもなく白鳥の代わりにニンフらが池で水を浴びているのをご覧になれよう。お目の良いそな

たのこと、恋しい方がいるか、従姉妹たちに混じってはおらぬか、容易に見分けがつかましよう。幸運に恵まれて彼女の姿を見つけたら、ぐずぐずなさらず、岸辺に置かれてある面紗グゼルと冠を取っておしまいなさい。そうすればあの方はそなたの思うがまま。この天津羽衣あまつはこころがなければもはや逃げることは叶いませぬ。それからあとそなたがなすべきことは、愛が囁いてくれるでござろう。』

友テオフラトスは口を噤つぶんだ。私は彼の話をいたく怪しみ、言うことを信じるべきか、お伽話で私をからかおうというでまかせだ、ときめつけるべきか、分からなかった。しかし相手は厳かな誓いを立て、表裏の無い真正直な顔つきで、これは確かなことだ、と断言した。その表情は、この話は事実だと言ひ張るなまじな肉体的宣誓よりも信ずべきものと私に思われた。しばらく黙り込んだあと私は、彼の言葉に全幅の信頼を置いてこう口を切った。

『いざ友よ、私をすぐにその船へ案内してください。お話しくださった冒険に挑戦してみましよう。この身の望みの的が見いだされると思われる泉の一つにたどりつくまで、私は永遠のユダヤ人ユダヤのように、この世界をめぐり歩く所存です』。

(三)

それから私はヘレスポントスの海峡を抜けてコンスタンティノポリスへと航海し、その地で巡礼の衣を纏い、聖地から戻つて来た数人の通路の仲間と一団になって旅をした。早くも私はズデーテンに到着したのだが、探しあぐねていたシユヴァーネンタイヒの在りかを教えてもらうまで、長いことこの地方をさまよつたのだ。この池を目にすると、私は神信心を装つて隠者の庵を建てた。ここにはまもなく敬虔な人々が訪れるようになり、だれもが私を聖者だと思ひ、内にはもろもろの煩惱を抱いているこの私に天の慰めをしきりと求めた。頭も心もいとしい白鳥の姿を目にする

ことに一途に向けられている私に。

定住することにしたあとすぐ、私は池の汀みぎにあの葦小屋をこしらえた。あそこからだと時期が来た折り沐浴する者たちをこっそり垣間見ることが出来る。そして医師テオフラトスが私を偽りを語ったのではないことを知った。夏至のころとなると、年よつて多少の違いはあるが、池に白鳥たちが飛来するのを私は見た。その一部は天然自然の姿のままであるが、一部は水に触れると愛らしい女人に変身するのだ。けれどもそのなかに我が恋人を見つけることはできなかつた。三回の夏を私はわくわくと待ち焦がれながら耐え抜いたが、いずれも徒勞に終わり、当てが外れた。四回目の夏が来た。私は倦まずたゆまず待ち伏せ場所から首を突き出していた。ある日の早晩に、上空をばさばさと飛んで行く翼の音が聞こえ、そこからすぐに何人かのニンフが池で沐浴しているのが見えた。彼女たちははじつと覗き見されていることに気づかず、天真爛漫に水の中でふざけていた。夜が明けると麗しのゾエの姿が目の前に浮かんでいるのを見て、私は有頂天になった。心臓が胸でどきどきと高鳴ったが、目眩めくらめく激情に全霊を奪われた私は、友テオフラトスのせつかくの教えをすっかり忘却してしまつた。魅惑めいごつ溢れる恋人の空飛ぶ道具の面紗というたしかな担保を押さえて、彼女をわが所有もにする代わりに、爆発する歡喜のあまり、葦の隠れ家から飛び出し、大声を挙げこう叫んだもの。

『ナクソスのゾエ、我が魂の命よ。この私がかつてあなたの忠実な親衛騎士だつた異国の騎士だとお分かりますか。恋のお蔭であなたの秘密を漏れ聞き、ここ、美の泉のほとりまではるばる参つて、ひたすらお待ちしておりました。理不尽に踏み込まれた水浴の一行はこの不意打ちにひどく驚かされ、甲高い悲鳴を挙げると、手をくばませて池の水を汲み、驟雨しゅううのように私に注ぎかけた。これはまあ、私の不遜な視線に目潰しを喰わせようとしたのだ。けれど私はこの怒りのふるまいを恐れ、アクテオンの運命（死生）を思い出し、ちよつと怯えて後ずさりをした。その間に彼女たちは

葦の繁みにさつと滑り込み、身を隠してしまった。その直後七羽の白鳥が舞い上がり、空高くに翔んで行き、見えなくなってしまう。そこで私は自分の愚かしいやり口を思い返し、物狂いのようになって、衣を引き裂き、髪、髯をかきむしり、ひきむしり、嘆きに嘆いたが、やがて狂気も鎮静、あぐみ果てた憂愁に変わった。物思いに耽りながらとぼとぼと庵に引き返すことにして、葦の隠れ小屋の向かいで白鳥たちが飛び上がった場所を通る道を取った。そこで見たのは草の葉からこすり落とされた朝露と、湿った砂に刻まれた一つの足跡。これは私にはゾエの優美な足型と思われた。その傍に巻かれた小さな包みが転がっている。私はそれを震えながら手に取った。拡げてみると、それは極上の白絹地の婦人用手袋の片方で、ゾエの華奢な手以外には合わぬ小ささ。その中からぼろりと転がり落ちたのは燦然ときらめく心臓の形の紅玉ルビが嵌まった指環だった。この明らかにわざと置き去りにされた品を私は自分に好都合に解釈した。推量はこうだった。ゾエがこの贈り物に託して言おうとしたのは、わらわはそなたに心を残してまいります、そなたを想わぬわけではありません、今は礼儀上仲間と別れることは許されませんでした、できるだけ早く道連れ無しでシユヴァーネンタイヒに戻り、そなたの願いに耳を傾けます、だろうと。こう考えて私はみずから心慰め、一年、二年、そして数年、倦むことを知らず、憧れ望む白鳥の到来をじっと待った。しかし私の無思慮な行為のせいで彼女たちにとって池はどうやら鬼門となってしまうようだった。その後数羽がまた来ることは来た。お蔭で希望が改めて甦った。私はたゆむことなく待ち伏せし、時折天女のような姿を垣間見て楽しんだ。しかし、だからといって五官に感銘を受けたわけではない。なにせ私が見たいのは魅惑のゾエだけだから。そして彼女と再会することは決して叶わぬのだった。

一方私はあの指環を聖遺物のように貴重品を入れる小箱に納めた。あのたおやかな上臈への思慕は心の神殿に等しかった。拾い物をした場所に私は薔薇の木を植え、その周りにたくさんの当帰草アイノササエ、瑠璃草オトコノ



マコト)、そして勿忘草(ワスレナグサ)を栽培した。いとしの女むすめが戻るのをあてどもなしに待ち侘びているうち、時は私の背を曲げ屈ませ、額に深い溝を刻んだ。だが、それにしてもな、この池に白鳥たちが飛んで来ることは私には相変わらず嬉しいこと。青春時代の冒険と生涯で一番楽しかった夢を思い出させてくれるからの。この世の巡礼の旅の終わりにある今、過去を厳かに振り返って見ると、なるほど、苦々しく認めねばならぬが、私はおのれの人生を、裕福な遊蕩児が遺産を濫費するように遣い果たしてしまった。それによって得た物もないし、享樂も味わわずにだ。想像力を虜にして放さず、目覚めても元氣の回復より肉体の倦怠を跡に残す、あの長い冬の夜の夢幻のように人生は過ぎ去つてしまつた。さはさりながら私は、醉生夢死の生涯を送り、幻想やはかない妄想やらにその最良の部分捧げ、営みのすべてをこれに費やすことこそ、死すべき定めの子のありきたりの宿命だと経験上知っているの、心安らかにしておる。血道を上げての熱狂沙汰は、聖俗いずれに向けられようと、いずれも皆たわけたよしなしごとにも過ぎぬ。求道精進として色慾三昧と同様一文の値打ちもないのだ。隱修士の草庵やら修道院の僧坊に籠もつて聖人だと崇められていようと、森や野原をさまよい歩いて、月に見入り、花や草を引き抜いては鬱然として傍らのせせらぎに投げ込み、恋の殉教者を気取り、ほくは辛い、あたし苦しいの、と言ひ散らして、岩山や小川や、さては氣の置けない月に溜め息混じりの悲歌を聞かせよう、と深く物思いに耽つている手合いはどれもこれもばかげた夢想家だ。なぜなら、冥想精神というやつは、どんなたぐい、どんな性格のものであれ、人生で最も悲惨な茶番劇なのだ。まあ、野良のらを耕す鋤について歩いたり、葡萄採りの鈍鎌や土掘りの円匙ウツシと一緒に別だがな。私は果樹に接ぎ木したり、葡萄畑で植えつけをしたり、甘いメロンを栽培したものが、お蔭で疲れた旅人が少なからず元氣を回復

ただだけでなく、私の信心ぶりを評判にした断食や祈禱や懺悔の苦行に比べて、まことにもって褒められる仕事だったよ。私の人生譚よりもまた数等増した。だから』、と師父ベンノは傾聴している忠実なフリーベルトに向かつて言葉が続けた。

『だから、私は、壮健な若者であるおまえがこんな辺鄙な所でうかうかと生涯を終えてよい、とは思わぬ。私に残されている僅かな時期の間は、おまえにはまだ傍にとどまっていて欲しい。しかし、おまえが私に最後の奉公をして、亡骸を墓に納め終えたら——この墓穴はもう何年も前に似而非信心からあの砂岩の下に私が掘っておいたものだ、お前は浮世に戻り、働きの男として額に汗して日々の糧を稼ぎ、可愛い女房と、食卓の周りに群れ集う子女に恵まれた賑わしい一族を養うがよからう。サビ二人の女たちの略奪は昔ローマ人に幸福をもたらした。そのつもりがあるなら、やはり幸せが微笑んでくれるかどうか、試してみるがよい。ここの池にやって来る妖精族の出の美しい乙女を捕まえるのだ。その女性も、愛の絆に引かれれば、おまえとともに暮らすことを承諾しようぞ。しかし、以前の恋の炎がその心を掴んでいて、おまえをいと思えぬというなら、蝶は放して飛んで行かせるのだよ。さすれば喜びの無い結婚で悪魔がおまえを苛むことはあるまい』。

〔四〕

静かな地平線にすでに白じらと夜が明け始めていた。そこで話好きの老人はこんな教訓でその不思議な物語を結ぶと、長いことなおざりにしていた休息を取るために、枯れ葉でしつらえた臥床に手足を伸ばした。しかしフリーベルトの方は、夥しい考えがごちゃごちゃと纏まりなく脳裡に入り乱れていたので、眠りは目に訪れて来なかった。彼は庵の戸口の外に座り、昇る太陽を真つ向からみつめた。そして頭上を旋回している燕たちがどれも白鳥のように思

われ、狩りをするぞと心に決めた。幾度か月相が移り変わったあと、ベンノ神父はまどろんだまま安らかに息を引き取り、その養い子の手で埋葬された。エルツゲビルゲの信心深い山人たちはひどく嘆き悲しみ、天なる神との仲介者を失ったことを悼んで、その奥津城に参詣に來たので、故人の相続人にたつぷりした利得をもたらした。悩みを負う素朴な民衆は聖の尊い遺物のなにかの拝領をしきりと望んだので、相続人はそれを授けはしたが、快い響きの貨幣と引換えにすることを怠りはしなかった。彼は隱者の古い衣を一着切りこまざき、その小さな断片を神聖な骨董市にやつて來るだれかかに頒けあたえた。この稼業が繁盛するのを見て取ると、彼の心に商人氣質が目覚めた。同様に長持ちする物が他にないかととつくり思案したあげく、師匠の山査子の杖を刻んで細い木片にし、これを爪楊枝として使うと、齒の痛みに効き目がある、と吹聴した。なにせその原料には事欠かなかったから、得意先さえ見つけていたら、彼は全キリスト教世界にこの靈驗あらたかな爪楊枝を供給したことであろう。時が経つにつれて参詣人も減少、世捨て人の住処は名実ともに世に捨てられた。けれども、まったく人に邪魔されず自分のロマンティックな考えに耽りたがっている庵の主には、その方が一層ありがたかったのである。彼は、昼がどんどん長くなって夜をしないで短くし、太陽が天頂に近づいて行くのを喜んで見ていた。夏至のころおいとせつせと池の見張りにでかけ、明け方と暮れ方には待ち伏せ場の葦小屋に身を隠し、アルバヌス聖人の祝日の前の晩、かねてから待ち望んでいた発見をした。三羽の白鳥が南から悠々と飛來、すべてが安全かどうか確かめようとでもいった風情で、空の高みで三度池の周りをめぐり、それから徐々に葦の繁みに降り立った。それからほどなく三人の愛らしい女性が典雅の三女神のように両手で抱き合つて姿を現した。死すべき定めの人の子の目にこれまで映じたうちでこのうえもなく素晴らしい一組の図形だった。彼女たちはじゃれあいながら、水晶のような水面に漣を立てて歩み、安心しきつてお互いをくすぐったり、調べ麗しい唇から朗らかな唄をくちずさんだりした。その様子を窺っていたこちらは甘美な陶酔に茫然、



大理石の柱のように体もこわばり、獲物を捉える絶好の瞬間を危うく逸するところだった。幸いまだ思考力が奮起して、ぎりぎりのところで恍惚の魔呪から身をもぎはなした。彼は急いで持ち場を離れ、繁みを抜けて白鳥の一行が飛ひ行ぎょうの衣裳を置いた池の汀へ姿を見られぬようにそつと忍んで行つた。見つけたのは三枚の乙女のつける面紗が草の

中に拡げられているさま。素材は見知らぬ織物で、蜘蛛の巣より繊細、積もつたばかりの雪よりも白い。面紗の上端は小さな黄金の冠で締められていて、鬘むす飾り状になっているので、さながら羽毛のとさかのよう。それらの傍らにはもつと強靱な布で作られた海緑色と肌色の下着が散らばっていた。見たところペルシヤの絹でできている。無法な略奪者は貪欲な手をぐいと伸ばして手近の面紗をつかみ、大喜びで獲物を携え住処へと急いだ。幸運がどんな運命をあたえてくれるか、わくわくと待ち焦がれながら。

この宝物を鉄の櫃に大切にしまいこむと彼は、岩窟の戸口の外の長椅子のような形をした芝生に、鳥が翔ぶのを見守つて運命を予言しようとする古代ローマの占鳥官アウゲルのように座つた。宵の明星がきらめき始めると、そのあとすぐ二羽の白鳥が気き怯じれた様子で舞い上がり、猛獸かなんぞに駆り立てられているかのように慌ただしく飛び去つた。そこで心はぶつ

ぶつと沸き立ちだし、歓喜が血管中を跳ね回り、身体の腱がびくびく、ちくちく痙攣した。好奇の心は彼を池へと衝き動かすし、慎重は洞窟に引き留める。長い闘いのあと、熟慮が——恋の道では滅多にないことだが——勝ちを占めた。この狡いやつは考えたもの。悪戯を隠す方が得策だし、事に關して有利だろう。少なくとも泥棒をやりました、と言うよりは、白を切った方が利口だわい、と。で、その光が多分綺麗な夜の鳥をおびきよせるだろう、と考えて急いでランプに点火。それから数珠を手に取り、いかにも信心ぶつた体裁をととのえ、念珠をつまぐりながらかたや外から何か音が聞こえないか、と耳をそばだてていた。

策略は成功。砂を踏むおすおすとした足音がすぐに聞こえた。いかにも恐れはばかる風情である。そつと窺われているのに気づいた庵の主は、茶目つ気を出して見せ掛けの信心ぶりを倍にしたが、まもなくそれもおしまいとなり、祈禱用の足台から身を起こし、脇を振り向いた。佇んでいたのは悲嘆に昏れた美しくもなやかな囚われ女で、顔には極限の苦悩と優しい恥じらいの麗しさを湛えている。これを見た多情多感のフリートベルトの心は、蠟燭の炎に溶かされる一滴の蠟のように甘美な恋にとろけてしまった。彼女の憂愁の色は、ロマンティックにお悩みあそばすわがドイツのご婦人がたにはいずれも真似する術もないほど、類を絶して美しかった。気もそぞろに懇願の身振りをしながら、いとも優雅な唇を開く。若い隠者は耳にこよなく快いその律動的な声音を聞いたが、相手の話が一言も分らなかった。乙女の使った言葉は異国のものだったからである。それでも彼にはその内容が容易に推量できた。どうやら奪われた面紗を返して欲しいとおすおす頼んでいるらしい。けれども意地悪なこちらは相手の身振りを誤解したふりをよそおい、この敬虔な隠れ家では貞操の心配は一切無用、と得心させるのに努めただけ。離れた岩窟の小部屋の浄らかにととのえられた臥床を指し、飛びさり美味な果物と砂糖菓子の食膳を供し、隠者の知恵が教える権謀術数を総動員、乙女の信頼を得ようとしたもの。けれども畏に掛けられた美女の方は何も目に入らぬ様子で、部屋の隅に



座り、深い悲嘆に身を任せて、百合のように真つ白な両の手を揉み絞り、絶え間なく泣き、嗚咽する。根が善良なフリートベルトはこれには胸がきゅんとして、自分も涙をこらえられなくなった。こうした愁嘆場を演じた彼は儲け役で、麗しい異国の女性は、それも優しく同情されてみずからの苦悩がいくらか慰められるのを感じ、この思いやり深

い博愛主義者を面紗盗みの嫌疑から外すことにして、心中許しを乞うた。こうなつては、人の好い宿の主に悩みの原因を理解してもらう手だてを見つけようというのがひたすらの願ひ。自分がどうして苦しんでいるのか、相手にはとんと推測がつかないようなので。

隠者の洞窟での第一夜は深い悲しみのうちに過ぎた。が、曙の紅くれなゐには悩める者の夜の涙をその薔薇色の指で拭い去るといふ力が昔からあたえられている。日の出の刻限フリートベルトはいつもの勤行ごんぎょうをおこなない、これは異国の美女の気持ちを落ちつかせた。彼女は供された朝餉あさげをいくらか口にしよう説得され、それが済むと、失くなった面紗をもう一度探しに池の畔へと出て行つた。というの

は、気まぐれな西風ゼフィールがあゝの輕羅をおもちゃにして、どこかの繁みに吹きつけたのではないか、と考えたからである。世話好きなフリートベルトは彼女と同行、捜すのをまめやかに手伝った。無駄骨折りだと百も承知で。試みが失敗に終わると、たおやかな乙女の額はまた憂いに曇つたが、その血管には軽快な氣圈の血が流れていて、憂いや哀傷は流砂に落ちる夜の影同様彼女の心にそう深い根を張りはしないのだった。乙女はしだいに運命に順応、悲しげな目は夕映えの中の雲のように明るく輝くことがあり、寂しい暮らしの伴侶にも慣れ、その視線は時折若者の潑刺はうちとした頬にまんざらでもなげに留まるのだった。そうした一切を目敏い庵主は見逃さず、こういう吉兆をそれだけ一層活用し、数知れぬ小さい心遣いで自分の有利な立場を固めようと一意専心。恋する身とて感覚は繊細になり、女心を洞察できるようになつたので、單純朴訥せんとくだつたシユヴァーベン氣質はすっかり造り変えられた様子。庵の二人にスパルタ風ではあるが、表現豊かな言語を授けたのはまさに發明の母たる恋心で、彼らはインクレとヤリコ（実注）のようにお互いに意思の疎通ができるようになった。

フリートベルトはかねてから、未知の美女がどの言葉を話すのか、いかなる民族の出身なのか、それからまたどういう身分の生まれなのか、知りたいものと思つていた。愛が似た者同士を対にするものかどうか試して見たかったので。愛らしい乙女の小さい口からまろび出るのはギリシャ語なのだが、無知な門外漢のこととでもちろん彼には分からなかつた。なにせこの言葉だろうと、お国訛りのシユヴァーベン弁以外はすべて南蛮駄舌げんざつと変わらぬ。が、新發明の会話法の助けを借りて覚えたのは、幸運が綱に掛かせてくれたのがギリシャ美人だということ。たしかにフリートベルトの時代にはまだギリシャの美の典範がドイツの青年の空想を燃え上がらせはしなかつたし、恋人の魅惑の数々をギリシャ語に翻訳しよう、ギリシャ的な体つきを褒め讃えよう、女性の肉体の最も美しい釣り合いは八頭身から九頭身だとして、鼻の付け根が額と直線で続いているのをギリシャの横顔と呼ぼう、などといったことはだれ

も思いつかなかつた。尺度ではなく眼こそ、習い覚えの知識ではなく感性こそ、その判定が適正だと認められる美の唯一の審判者で、ギリシヤ人の判断だろうと、非ギリシヤ人の判断だろうと、一切関わりなし。そういうわけでフリートベルトは相手がギリシヤ系だと知る前から、カリストは美しいと感じていた。けれども、彼女に、自分は公侯の家柄でナクソスの君主ゼノと麗しのゾエの末娘だ、と告げられたときには、大いに耳をそばだてた。

「ねえ、隠者さん、教えて」と彼女は言葉が続けた。「このお池にはどんな事情があるの。ご存知でしょ。どうしてお母様は、北国で沐浴してはなりません、つて娘たちにおっしゃったのかしら。お母様はここで面紗を失くすといったような似た体験をなさったのかな。お母様は毎年私たちをナイル河の泉におやりになった。ご自分がついていらしたことは一度もないけど。お父様は焼き餅やきでね、お没りなまになるまでお母様を嚴重に閉じ込めてらしたから。それでお母様は、美しさと若さを取り戻す妖精の水浴びがおできにならなかつたので華やぎが失くなり、甕つぼれて老けてしまわれた。寡婦相続分の莊園に独り寂しく閉じ籠もつて陰気に生き長らえていらつしやるけど。だつて美しさと若さがうつろつてしまつたら、女というものは生きる喜びが消えてしまいますからね。私たちはお母様に監督されながら、お父様の跡を継いでキララデス諸島を治めている叔父上の宮廷から遠く離れて暮らしていました。お母様が私たちと一緒にいることは決してありませんでした。私たちが毎年妖精の泉を訪れるちよつとの間以外はね。お母様たちは急に北国へ翔んで行きたくてたまらなくなつたの。若くて考え無しだからお母様の戒めを忘れてしまつたのね。あの人たち、この辺の土地だとエジプトの砂漠に比べて、蒸し暑さも日焼けもずっと煩わしくない、と思いついたわけ。お母様に注意深く内緒にしておいたここへの旅では、何も変なことに遭わなかつた。だから何度かここに水浴びに来る旅を繰り返したのだけど、とうとう私、お姉様たちの軽はずみの犠牲になつちやつたんだわ。ああ、水浴するニンフを待ち伏せする悪い魔法使いはどこに隠れているんでしょ。人を苛めて嬉しがろうという邪な気持ちから面紗を盗

むななて。ねえ、聖者様、あの不埒者ふちちにおまじないを掛けて、気圏の上層に棲くらんでいるなら、天から私の脚元あしもとによるめき落ちるように、光を怖がるやつなら、身の毛もよだつような丑三つ時に奈落の底から登つて来るようにして頂戴な。そしてあいつには何の役にも立たない私の持ち物を返せ、つておっしゃって」。

フリートベルトは、どこかの魔法使いが泥棒を働いたのだ、と魅惑的なカリステが勘違いをしているのを少なからず喜び、そう思い続けるようにしむけた。でつちあげたのは呪いを掛けられた王子のお伽話。言い伝えによれば、これがシユヴァーネンフェルトを暴れまわり、時折翼の生えた浴客をからかつて、邪悪な楽しみを味わっていることにした。同時に彼女に言い含めたのは、自分には精霊を祓う力は授かつていないが、こんな話をたしかに耳にした、ということ。昔むかし、ある白鳥姫がやはりここで面紗を失くしたが、その代わり実のある恋人を見つけ、愛の翼に庇護されて空飛ぶ道具に諦めがついた。若さと美貌を保つ奇跡の泉がこんな近くの手元にあるのでなおさらだった、と。魅惑のカリステはこの作り話を聞いて随分気持ち落ちついた。ただ、自然はこの荒れ地に数々の快適さをあたえてはいたが、人里離れた在所に暮らすというのが、彼女には気に入らぬ様子。これは恋の双子の姉妹である感傷かんじやうが彼女の心をまだ捉えていない証拠。なにしろ寂しい谷でも、荒涼とした人の住まぬ島でも、感傷に感傷する相愛の者たちには至福エリユンヂョウの野ノそのものなのだから。親切な庵主ではあるが、お客の望みをすぐには聴き入れない。彼女とともにこの侘びしい住処をあとにするのはやぶさかでないくせに、かまびすしい浮世に戻るといふ犠牲を償かたってくれるのは、貞節な妻に抱かれて家庭の幸せを味わう楽しみだけ、とほのめかしたのである。そう言いながら彼の目はいかにも親しげにきらめいたので、それがどんな意味なのか、彼女は容易に悟ることができた。そこで顔をあか赫からめながら目を伏せる。はっと元気づいた彼は希望に燃え、すぐに荷造りを開始、再びきらびやかな軍人のいでたちをととのえ、美しい道連れと一緒に故郷目指して旅立った。

〔五〕



シユヴァーベンの国にエグリンゲン・アウフ・デア・ラウエンアルプと呼ばれる小さな町がある。これはグラウヴエネツグ殿の先祖代々の所領で、フリートベルトの母親はここで寡婦暮らしやもめをしていた。没なくった夫を偲んで祝福する一方、可愛い息子のフリートベルトを殺しやがったんだよ、とマイセン人を呪うは呪うは。マイセンへの外征から

帰還して門口で施しをねだる手足の欠けた傭

兵には、だれにでも憐れみ深くブーフホルン

銅貨を一枚訳注1恵んでやり、息子の消息を訊き漁

るのだった。で、お喋り上手な廃兵がけなげ

な若者を種に作り話を一席やらかし、立派な

勇士として闘い、英雄的な死を遂げ、戦場で

血を流しながらことされる前に、優しいおっ

かさんにくれぐれもよろしく伝えてくれ、と

言った、などと告げると、その嘘つきに樽か

ら一シヨツペン（三合ほど）の葡萄酒を注い

でやり、前掛けがぐしょ濡れになるほど夥し

い涙をお袋らしく眼からはとばしらせるのだ

った。このような嘆き悲しみのうちに四回の

夏が過ぎ、吹きすさぶ秋風に樹々の枝から黄



や紅の葉がすっかり払い落とされたころ、この静かな地味な小邑は降って湧いた興奮に浮かされた。馬に乗った先触れがやって来て、勇ましいフリートベルトはシュヴァーベン戦役で露と消えたのではなく、^{ザンク}遠国から故郷を指して来る途中。立派な騎士の物の具に身を固めており、東洋で数々の冒険をやつてのけた、とのこと。そして世にも麗しい許婚女^{いひなすけ}を同行、これはエジプトの皇帝^{サルグ}の息女で莫大な持参金付きなのだ、云々。周知のように噂というものはなにもかも針小棒大に誇張する。事の真相は以下のごとし。フリートベルトは師父ベンノの遺産と新案特許の爪楊枝工場のお蔭でたつぷり財産をこしらえたので、シュヴァーベンに戻る旅の途中村々で伴回りを増やしたので。つまり、すばらしい馬衣を着せた乗用馬数頭、荷駄馬数頭を購入、自分も美女カリストも壮麗な衣装に身を凝らし、下男・下女を何人か雇い、アラゴン王の大使もかくやとばかり威風堂々行進したわけ。

エグリンゲンの連中はこの行列がアウクスブルク街道からこちらへかっぱかっぱと近づいて来るのを目にすると、猫も杓子も歓声を挙げ、飛び跳ねながら駆け集まった。フリートベルトの姉妹や親類、それから尊敬すべき市参事会員各位を先頭にした市のお歴々が、市の旗を掲げて迎えに出、



フリートベルトが死者の中から甦ったかのように、帰還した同胞が市門に入る際、塔上から喇叭を吹奏させ、旋律美しいシヤルマイを響かせた。(訳注)さめざめと泣き続けの母親は悲喜こもごもの態で息子を抱き締め、近所の衆や親戚たち到大御馳走をふるまい、貧民たちにはありつたけの銅貨の蓄えを分けあたえた。それから息子の未来の嫁御の綺麗な姿形をいくら眺めても見飽きぬ。ちやほやべたべた、気の好いおしゃべりのせいで相手は耳が聞こえなくなりそう。

ギリシャの美女はすぐに町と周囲の土地の噂的となった。大勢の騎士、貴族、それから乙女の鑑定家を自負するその他の面々が押し合いへしあいやって来て、有卦うけに入っているフリートベルトを兄弟だの従兄弟だのと呼び、気の置けない仲間づきあいを始め、永遠の友情を誓ったもの。もつとも彼の方ではこめかみに嫉妬深い血管がうねり、そのせいですぐに目眩めまいやら頭痛やらが起きるので、麗しのカリストを世間の目から秘し隠し、家臣として仕えているグラウヴェネック殿に勤仕えいするため騎乗して宮廷に向かうときにはいつも、目敏い母親を彼女のお目付役に任じるのだった。その一方恋の絆を固めるのにありとあらゆる手を尽くしたので、ギリシャの美女は、故国へ帰る手段は皆目見当たらないし、今や堂々たる青年貴族の装いで、以前の灰色の隠者の衣のときはまるで違った風采のこの潑刺とした男性が好ましく、身分の隔たりを越えて彼と結婚することに同意した。フリートベルトは相手にすばらしい花嫁衣裳を一重ね贈り、華燭の典を挙げる日取りが決められ、肥えたこやし犢うしと去勢雄鶏カバウケンがつぶされ、婚禮の菓子



材料が混ぜ合わされた。

その前日花婿は土地の習わしに従い結婚式の客たちを招待するため馬でかけ、美しいカリストは彼の留守中嫁入りの装身具・衣裳を整理するのに大忙し。お洒落心にそそられて、新しいドレスが自分のたおやかな体に合うかどうか試着する。完全無欠なものにもけちをつけ、なにかしら欠点を見つけたがるあら捜し癖はご婦人がたにはありきたりのことだが、そのせいですぐに気に入らぬ箇所気づいた彼女は、手直しが必要だと思い、経験深い姑に吟味してもらわなきや、と考えた。お喋り好きの女性がやって来て、装いをととのえた上臍を目の当たりにすると、たちまち舌が活動を開始。麗しい嫁御の艶姿あですがたに滔々と賛辞を注ぎ、仕立屋を選んだ息子の良趣味、ドレスを裁断した仕立屋の腕の冴えを褒めて褒めて

褒め抜いて、止まるところを知らぬ有り様。でも、後者の点に関しては姫君が必ずしも自分と意見が一致しない由を聞くなり、洗練された流行について知識が乏しいのがばれないよう話の向きを変更、ために仕立屋は大窮地に陥った。乙女の文句の対象はもっぱら花嫁の面紗のへんてこな恰好。まるでアウクスブルクの雨避け合羽みたい、と言う。

「ああ」と溜め息をついて「黄金の冠に巻き込んだあるギリシヤの面紗がありましたらねえ、私のご婚礼衣装にどんなに照り映えるでしょう。それはお空をふわふわ飛び、西風がちよっかいを出す軽い雪雲みたいでしてね、町中の



女の人たちはとつても私を羨ましがって、フリートベルトの恋人はこの世で一番綺麗な花嫁だつて褒めそやすでしように。失くなつちやつたんですわ。ギリシヤの娘に魔法のような魅力をつけてくれ、若者の眼をうっとりさせたあの飾り物は」。

その言葉と一緒に憂いの涙が蔷薇色の頬を伝つて雪白の胸元へとぼたりと落ちた。そのため人の良い母親はすっかり情に脆くなり、心臓がきゅつと苦しくなつた。花嫁が泣くというのは子どもが母の胎内で泣くようなもので、悪い前兆だと思つたからなおさらである。こう氣遣いしたせいで秘密を——もう長いこと口先から出かかつていたのだが

——つい漏らした。開けつびろげな性格のフリートベルトはシユヴァーベンのとんちきをやらかして、(注3)口の軽いお袋さんに面紗を盗んだ一件を喋つてしまつていた。それも面紗の特性は説明せず、ただそれをきちんと保管させようと、愛の担保だからしまつておいておくれ、と母親に渡し、堅く黙っているように、と言いつけただけ。お袋さんは、長いこと心の重石おもしになつていた内緒事をすつぱり厄介払いする絶好の機会を見つけたのを喜んで、こう言つた。

「泣くんじゃありませんよ、可愛い嬢さん。お日様のように明るいお目々が曇らないように、嬉しいご婚礼が涙になつて流れてしまわないようにね。面紗のことも心



配りません。ちゃんとしてまっています。それもわしの手元にね。そんなにあれを被りたいとお思いなら、わしの亜麻紡ぎ部屋から出して来てあげる。お前様の婚約者にびっしやり秘密を守って、わしのことを告げ口しないと誓いを立てて約束してくればな。わしもそれがどんなにお前様の花嫁衣装に似合うか、どんなにお前様を引き立てるか、見たくてたまらないよ。

これを聞いたカリストは彫像のように立ちすくみ、驚きのあまり血が血管の中で凝る思い。やっと見つけたという歓喜と猫かぶりのフリートベルトへの腹立ちに数秒身動きもできずに愕然としたまま。けれどもやがて老婦人が上履き靴をばたばたさせて来たのを耳にすると、一所懸命正気に立ち返り、相手の手から嬉しそうに面紗を受け取り、窓を一つ開いておいて、黄金の冠を頭にしっかりと嵌め、大気の薄物を両肩に羽織ると、白鳥になって翼をぱつと拡げ、さつさと窓から飛び出した。

この摩訶不思議な変身に今度は老女がびっくり仰天。大きく十字を切るなり、甲高い悲鳴を上げ、聖処女のお助けを頼みまいらす。というのも彼女は精神界についてその時代相応の粗雑な概念を抱いていたから、麗しのカリストは幽霊でなければ魔物に他ならぬ、と思ひ込み、大事なフリートベルトも彼女の目には突然おぞましい化け物で悪魔使いに変わったので。このことを彼女はすこぶる嘆き悲しみ、サタンの罠にがんじがらめに巻き込まれた息子より、い



つそ良きキリスト教徒としてマイセン軍の手に斃れた方がまだだった、とかきくどいた。フリートベルトは、留守中家でこんなにも嘆かわしい破局が起つたなどとは露知らず、夕方気も晴々のご機嫌で駒を乗り付け、拍車をりんりんと鳴らし、婚約者の部屋への階段を急いで昇り、いとしの女を腕に抱こうとした。しかし扉を開けたとたん、真つ向か

ら浴びたのが母親の破門宣言。老刀自は雄弁多弁の堰を切つて落としたので、ラインの瀑布さながらの非難と呪詛が彼めがけて渦を巻いて轟々と襲いかかった。そこでどんな椿事が起つたのか分かつてひどく動揺した彼は、こちらも怒りに燃えて荒れ狂い、母親が大声をあげて警鐘を鳴らし、家中の者を呼び集めなかつたら、最初の激昂で母親と自分自身を殺してしまうところだった。びっくりした召使たちはこの狂えるオルランドの武装解除に幸い間に合った。

最初の大爆発が双方ともに鎮静すると、もう少し訳の分かつた説明がおこなわれた。フリートベルトは、自分が妖魔召喚者で邪法に関わっているのではないか、あるいは、ピオンデッタみたいな女を家族の一員に迎え入れ、信仰篤い母親を地獄の化物の姑にしようとしたのかも、という嫌疑を、できるだけうまく晴らそうと努めた。彼は美しいカリストと自分との物語を逐一打ち明け、彼女の空飛ぶ羽衣を手に入れた次第も話した。しかし一度女がこうと思ひ込んだとなると、その偏見の前ではどんな啓蒙をしても無駄。このことについては老女は考

えたいように考えた。フリートベルトを彼女が裁判沙汰に引つ張りださないのは、かかつて母性本能のお蔭に過ぎぬ。そうこうするうちこの奇怪な事件はさまざま憶測を生み、なんとも怪しげなフリートベルトが、ファウスト博士かコルネリウス・アグリッパのように大魔法使いとの悪評をこうむらぬためには、黒犬が一匹足りないだけ。(実注)

花嫁がいなくなった花婿は不幸のどん底に陥つた。彼の心は美女カリステの失踪に傷み、せつない絶望に千々に乱れ、彼の命は長いこと生死の狭間を揺れていた。どちらの選択をするにも彼は克己を強いられた。世界周航を無事に終えたと思つた矢先、港の口で難破してしまふ悲運に遭うほど辛い境遇は滅多にあるまいが、婚礼の前の日愛する花嫁を失うというのはこれと同じである。彼女が死の獲物にされたのなら、強盗に攫さらわれたのなら、あるいは冷酷な父親にどこかの修道院に幽閉されたのなら、後を追つて墓に入るなり、強盗を追跡するなり、錠の下りた修道院の門扉を打ち破るなり、との手だてが恋人には残されている。しかし相手が窓から飛んで行つてしまつたのでは、追跡がでさるのはあのパリの気球乗りたち(実注)くらいのものであるまいか。しかし、死すべき定めの人の子に気圏を抜ける道を開拓した高度の技術は、哀れなフリートベルトには用立ててもらえず、これはもつと後の、もつと幸せな時代のために取つて置かれた。英国社会の目先の利かない、あるいは妬み深い知つたかぶり屋たちは、彼らの隣国人の気体静力学(航空術)の神童のことを好きなだけ意地悪くこばかにしてあげつらうがよろしい。しかし、天から瀝青(ピソチ)と硫黄を雨霰と降らせる空飛ぶ憲兵隊(マレンヨッセル)の方が、動きの鈍重な沿岸監視官や口喧しいだけの下院が布告する禁止法令の紙切れの数々とは比べようもなく、ブリテン諸島の海岸でのいまいましい密輸業に確実な抑止効果を挙げるのは明々白々である。(実注)

フリートベルトのもとから飛び去つた花嫁の行方を突き止めるのに彼に残されたのは、蛙どもが旅にでかけるとき、目的地に到着するまでその折々に応じて採るやりかた、つまり跳ねたり、泳いだり、だけだった。恋しい女に逢いた



くて矢も楯もたまらないため、シユヴァーベンシユヴァーベンの国からキクラデス諸島までの距離は、彼の頭の中で月への旅もさこそと**い**うほど**抜**がる。

「ああ」と彼はすっかり絶望して叫んだ。「地べたを這うのろまの蝸牛かたつげが身の軽い羽の生えた蝶を追つ掛けるなんてとんでもない。蝶はひつきりなしに花から花へとひらひら飛び回り、一箇所にじっとしていかないのだからな。それにカリステがナクソスへ帰ったという保証もない。故郷では、ぐれ者よと後ろ指を指されるのが恥ずかしくて、どこか他の逃げ場所を選んだということはあるまいか。また仮にナクソスにいるにしても、それがおれにとって何の足しになる。国の君主の姫君にたかが槍担ぎの兵卒風情が眼を上げることなぞ許されようか」。

心挫けたこの男はとつおいつ考えて何日も悶々とした。彼が情熱の強さを試練に掛けたとしても、熱狂がしばしば奇跡を起こすことを知っていたにしても、苦しまずに済んだわけではない。が、突然、冷静な思案では到底決めかねるようなことを本能がやってのけた。財産一切を持ち運びのできる形に変えると、愛馬の黒馬あに鞍を置き、口数の多いお袋の見送りはまっぴらごめんと家の裏口から外へ出、早駆けで故国の国境を越える。餌遣り一回でキクラデス諸島への旅を終わらせた**い**、とでも**い**うかのよう。幸いなことに師父ベンノベンノが選んだ道筋を思い出した彼は、かの騎士と同様ヴェネチアを経由、海路さまざまな艱難辛苦に遭遇したが難破だけは免れ、びんしゃんとしてナクソスに到着した。

気も晴々と岸に跳び移り、うずうずする歓喜を押さえて恋人を生んだ母なる大

地を踏みしめた彼は、是非この祖国で彼女を捜し当てたいものと、急いで美女カリステの消息を集めにかかった。しかしだれひとりとして姫君の行方を彼に告げることはできない。いろいろな噂は広まっていたし、陰であれこれの囁きはある。ちゃんとした娘が知り合いの輪から姿を消したらこうなるのは当たり前で、また、この手のひそひそ話がいなくなった女性の肩を持つことは滅多にない。たしかに誹謗中傷の投げ矢から普通身を隠す堡壘があることはある。言いたいことを言いやがるがいいさ、人が何とほごうが、おりゃあ一向構やしねえ、なる金言がこれ。そうしたければ、また、そうできれば、これをもって緊急防御とすればよろしい。しかし、乙女にだけは適用不可。なおいささかなりとも自分の評判が大事だと思っていればである。フリートベルトは恋人が自分を詐略にかけたのをつくづく恨み、隠者の庵に戻ろうか、それともナイルの泉の畔でまた羽衣の迫削を企もうかと迷った。彼がこんな具合に思案に耽っていると、キクラデス諸島の君主の封臣、パロスの領主イシドロスが、美女カリステの姉の一人イレーネ姫と契りを結ぶためナクソスに到着した。壮麗な婚儀の準備がととのえられ、式典の締めくくりは一大馬上槍試合トーナメントということになった。これを知ってシユヴァーベンの勇士の胸に昔の軍人氣質がむらむらと沸き起こった。憂鬱と倦怠に悩まされていたので何か気晴らしが欲しかったのだが、告示された騎馬戦で見つかるだろう、と考えたしだい。ことに布告官たちが街の市場やすべての辻々で、外国の騎士らにこれに参加するよう招いていたのでなおさらであった。なるほど故国だったら彼にはトーナメントに参加する資格はなかったらう。かの地では嘲弄侮蔑的になって闘技場の矢来やらいの外に放り出されるということが容易に起こり得ただろう。けれども異郷ではぎっしり詰まった財布を担保にすれば、生まれにつきものの家伝の特権を手に入れることはそんなに難しくはない。フリートベルトはナクソスには騎士というふれこみで滞在、少なくともドイツの仕立屋がよくバリで、男爵でござる、と名乗り、主人のもとから逐電した従僕がドイツ諸邦の宮廷で侯爵様で押し通す場合くらい威厳と品位は充分備えていたのである。彼は光輝く

甲冑を調達、高い値段を払ってきちんと調教されている騎士用乗馬を購入した。そして試合と定められた当日、何のさしさわりもなく場内に通された。もつとも彼の空想力が思いも寄らぬ悪戯をした。騎士たちを取り巻く円形の闘技場、そのぐるりに雛壇式にそそり立つ無数の観衆で一杯の客席が、あの恐怖のパン焼き籠かまどの再現かと眼に映じたのだ。けれど往々にして怯えというやつ、危険のまったなかにあつては勇猛果敢な振る舞いに拍車を掛けてくれるもの。自作自演の騎士殿は誉れ高く聞い、しつかと鞍上に保ちこたえたので、騎士の報奨を勝ち取り、それを新婚の奥方に手ずから授けて頂いた。

この機会に彼は麗しのゾエの手に接吻することも叶えられた。宮廷儀礼上当然なことながら彼女はいまだに名誉美姫の地位にあつたのである。元大臣が閣下の称号を保持しているようなものだ。とは申せ、歳月の齒はこの上臆からすべての魅力を嚙り取ってしまった、絵になるような魅力としては、昔は美貌だった老女のモデルになる他何も残されていなかった。フリートベルトはお目見えの際なにか異国の騎士の名を名乗つたが、ゾエがこうしたたぐいの者をいまだにとりわけ鼻屑していたからか、それともかつて彼女の所有物もちもので今心臓型の紅玉とともにこの外国人の手に輝いている指環に気がついたせいなのか、いとも親しくもてなしにあずかり、あちらはこの騎士が格別御意ごきよいに召したような様子。婚礼の騒ぎが一段落し、公妃が再び城下を後にしておのれの宮殿での静かな隠遁生活に立ち戻ると、フリートベルトは、出入り自由なのは気心の知れたほんの僅かの者に限られたこの修道院めいた聖域への参入を許された。ゾエは彼に母親のような好意を寄せたのである。遊苑の小暗い林を散策しながら、彼女は彼とともに傍らへ離れ、こう言った。

「そなたに頼みがあるのです、異国の方。拒んではなりません。右手の薬指に嵌まっている指環をどうして入手されたのか教えてくりやれ。この指環は以前わらの所有物でしたが、どうして、いつ、それを失くしたのか分からない

いのです。ですからそれがそなたのものになった顛末を知りとうてりませぬ」。

「奥方様」とこちらはからかつてやれとばかりの返事。「この指環はわが祖国で、さる馬上槍試合の折り、ある雄々しい騎士から正々堂々とかちえたもの。私はその者に勝ちを占め、先方はこれを命の代償といたしました。したが、どうしてその騎士がこれを入手したか、指環が戦利品としてその所有に帰したのやら、どこぞのユダヤ人から買ったのやら、さてまた騎士の報奨として授けられたのやら、あるいは相続財産として受け継いだのやら、申し上げることはできません」。

ゾエは言葉を続けた。

「わらわの物ゆえその品を返してたもれ、とお願ひしたら、そなたはどうしやる。相応な頼みなら女性には無下に退けぬのは誉れある騎士道の習いとか。けれど、打ち物取つて獲た宝ゆえ、くれの、贈れの、とは申しませぬぞ。その飾り物はこれほどの値とそなたが思うだけを代価にさしあげましょう。してご厚意は未来永劫忘れませぬ」。

フリートベルトはこうした強請事をされてもまったくうろたえず、むしろ自分の企みがうまく行つたのにほくそえんだ。

「高德な奥方様」と彼は言った。「あなた様のお望みは私には侵害すべからざる掟。ご承諾いたすのがこの身しだい
で済むことですな。騎士の名譽に掛け、命も財産もあなた様のおんためとあれば献上いたしましたしょう。どうかそ
せよ、と仰せつけのほどを。ただ誓いと良心を犠牲にせよ、とはおっしゃらないでくださいまし。この宝物は激しい
闘いのあぐく授かりましたゆえ、天地神明に掛けて、かような厳かな誓いを立てました。この指環は私の生涯で、祭
壇の前で心と手とをわが妻となる人に捧げ、これを婚姻の貞節の証とするまで手放すことはしない、と。この誓言
を実現する以外私にはこれを免れる方法はございませぬ。しかし、奥方様がその点で力添えしてつかわそうとの御意

なれば、花嫁と交渉なさり、彼女の手からこの昔のお持ち物をお受け取りになられることに何の異存もありませんね。」
 「よくぞ言いやった」とゾエが応じた。「わらわの侍女たちの中からそなたの眼鏡に叶う乙女を選ぶがよい。その娘にはわらわが十分な婚資を付けて嫁入り支度を調べてつかわしましょうぞ。ただし、その娘がこの指環は無くてもよいとし、そなたの手から受け取りしだい、わらわに返却するとの条件でな。またそなたにも高い榮譽を授けるつもりじゃ。」

〔六〕

この秘密条約が締結されるやいなや、奥方の修道院めいた宮殿はさながら後宮と化した。ゾエは国中の器量良しをことごとく自分のもとに招集、お付きに採用して、綺麗な衣装とみごとな装身具をあたえ、乙女たちの生来の魅力と流行小間物売りのあつかう人工の金びか物でなお一層高めようとした。というのも彼女は現代のわがドイツの女性たちと同様、そもそも金箔の額縁のお蔭で絵が売れるので、筆致のせいではない、と勘違いをしていたからである。日常の体験からすると、金襴緞子のスカートがロレットの聖母マリアへの崇拜を煽るわけではないように、宮中用正式礼服が恋を鼓舞するのに役に立つのではないのだが。けばけばしくない上品な化粧着こそ真の恋の制服なのであって、寶石のごてごての胸甲と白や金の絹レースなる意気揚々の羽飾り付き兜——こいつは勝ちを逃すもと——といった武装よりずっと多くの獲物をしとめるもの。

フリートベルトは歓楽の河を泳ぎはしたが、悦びの渦に巻き込まれることはなかった。再び息を吹き返した宮廷のさんぞめきの真つ只中であって、唄や弦楽や浮かれた舞踏の折りでも、彼の額には憂愁の縦皺が刻まれていた。このうえもなく美しいギリシヤの娘たちが彼のために着飾り、保磁子を付けられた磁石のようにいやがうえにも心を惹こ



いようで、むしろ厳しいストア主義かと思受けられた。これは彼女にはとんと不審で、指環を返してもらえるかどうかあまり希望が持てなくなった。

無為無策のうちに早くも数カ月が経ってしまい、じりじりしたゾエは、彼女の騎士——いつもそう呼ぶようになっ

うとするのだが、いつも冷やかで関心を示すことがない。潑刺とした若い男のこうした無感動ぶりは奥方にはさっぱり訳が分からぬ。恋の道について、彼女自身はいつも同国人の賢明なプラトンの教えに従いはした。それが性格によるのか、焼き餅やきの関白亭主が見張りを怠らなかつたことが彼女の情熱に水を差したのか、いずれとも決めかねるが、けれど、と彼女は思案、血気盛んな騎士には肉欲を嘉納するエピクロスの説の方が遥かに嬉しいだろうに、と。そこで奥方は彼の心を官能で絡め取ろうと全力を集中。しかし、この考えは間違っていたことを思い知らされる。エピクロスの肉感も、プラトンの説く恋愛のより繊細な精神的感覚も、彼には関わりがな

ていた——がいったい何に心を煩わしているのか、とつくり相談をする必要がある、と気づいた。春の帰来が祝われ、彼女のお付きの処女たちが皆摘みたての花冠で身を飾り、楽しい輪舞を始めた日、奥方は彼が独りぼつねんと東亭にいるのを見つけた。ここで彼は思うにまかせぬ恋を告げる暇潰し、折しも咲き初めた春の花の花弁をむしって台無しにするという仕事に精出していた。

「情無しの騎士殿」と彼女。「咲き匂う自然はそなたにとってそれほど魅力がありませんか。その最初の贈り物をつれなくめちやめちやにし、花祭を冒瀆なさるとは。わらわの苑生（えんせい）の花々も、わらわの宮廷の華やぐ乙女たちも、優しい気持ちを起こさせぬほどお心はあらゆる溫柔な感覚、あらゆる細やかな感覚に縁が無いのですか。どうしてこのうら寂しい東亭にいやる。悦びがかしこの舞踏の間から、愛があちらの大広間から、それからすべての繁みからも、この庭園の愉快な人工洞窟（ゴツツ）からも、そなたに呼びかけておりますのに。けれど、その悲しげなご様子が優しい心根もお持ちなことを示しているのなら、わらわに秘めた苦しみを明かしてくりやれ。お心を満足させることがわらわの力に叶うかどうか考えます」。

「ご明察です、賢いゾエ様」とフリートベルトは返答した。「私の魂（たま）の奥処（おくど）までお見通しでおられる。ご判断はまことに正確、私の胸には隠された恋の炎が消え残っているのです。それに希望の油を注いで絶やさぬようにすべきか、それとも炎がこの体の精気を吸い尽くしてしまうのか、どちらとも分かりませぬ。向こうで浮き浮きと輪を作つて舞いながら花祭をことほいでいるニンフがたのいずれにも、私の心は冷えて死んでおります。私を魅惑し、私がこの心を捧げた天界の乙女はあの楽しげな舞姫たちの中にはおりませぬ。それでもその娘御の肖像を御殿で見かけたことがあるのです。もしかすると、芸術家の灼熱の想像力が産み出した物に過ぎないかも知れませぬ。もつとも、自然という巨匠の手があらかじめすばらしいお手本を描いてみせたのでなければ、画家にあのような名作を成就することがで

きたとは、到底信じられませぬが」。

奥方はもうじりじりして、どの絵がこの若き騎士にそんなへんでこな効果を及ぼしたのか知りたがった。

「急いでわらわについて来られよ。」と彼女。「あの不埒な愛神ラブモルがそなたの心を弄んで怪しからぬ悪ふざけをし、女神の代わりに雲をそなたに抱かせたのかしら。なにしろあれの悪戯は天下一品ですからね。それともいつもの遣り口とは事変わり、そなたに対し誠実にふるまい、まやかしでなく本当の愛の賞品をそなたにあげることにしたのか、わらわが判断します」。

ゾエは選り抜きの絵の蒐集を持っていた。一部は名匠の傑作、一部は一族の肖像画である。前者の中には今昔の最も有名なギリシヤ系美女を描いた物があつたし、後者のうちには、以前まだ妖精浴詣でをしていたころ持っていた若やかな魅力のすべてとともに幾度か写し取られた彼女自身の絵姿もあつた。閉経期を過ぎてもしばしば女性にはありがちだということだが、見る影もなくなつて昔日の栄光の追憶を新たにしようという虚栄心がむらむらと目覚めたので、彼女は、もしかするとフリートベルトを魅惑して夢想を追わせているのは自分自身の肖像画ではないか、と思いついた。そこで、もし男に向かつて、

「ねえ、この絵のモデルはわらわ自身なのです」と言つて聞かせることを考えると、心中ぞくぞくするのを押えきれぬ。そして強力な魔法がこんな風に解かれたときの彼の驚愕を想像すると、今からもう面白くておもしろくて。一方狡猾騎士は自分の企みをよくよく心得ていて、口からでまかせに言つたことだが、画家の想像力云々など全然心配していない。自然界に実在する原型の方が絵筆が真似たものなどよりずっと美しいことをよくよく心得ていたからで、分らないのは、その原型に現在どこで逢えるか、どうやってまたおのが手に取り戻すかだけ。

画廊ガレリに入ると、彼は恐ろしく性急せうきゅうにいい画像のところへ飛んで行き、拝跪の姿勢でこう言った。



「ご覧ください、これここに私の女神が。いずこを捜せばよろしいのでしょうか。お言葉ひとつに、賢い奥方様、私の生死がかかっております。——お決めください。まやかしの恋が私を欺くなら、どうかお脚元で死なせてくださいまし。けれど、私の予感がこの胸の選択を裏切っておりませぬでしたら、お教えあれ、いずれの民、あるいはいずこの国にこの宝石が蔵かくされていますのか。さすれば、私はこの上臈を探しに出立いたし、騎士のいさむ勲の数々でご愛顧をこうむる所存」。

ご後室様はこの発見に少なからず狼狽した。なにせ推量とは大違いだつたものだから。彼女の顔にしかつめらしい表情が影を落とし、相変わらず美しく均衡の取れたその楕円形のかんばせは、その前までは楽しい考えでまろやかになつていたのだが、今は額から顎までの線がたつぶり一寸は伸びた。

「なんて無分別な方」と彼女。「もうこの世の人でないのか、それとも現代に生きているのか、愛に愛で応えることが叶う身なのか、それをご存じないまま、どこぞの女性にょしよにお心を捧げることがおできとは。ええ、そなたの予感はずつとくそなたを惑わせたわけではありませぬ。この可愛い顔は架空のものでも、昔の美女の記念碑でもなく、ある若い姫のです。カリストという名のね。ああ、前にはこの子はわらわの愛娘まなでした。今は憐れまれてしかるべき薄倅な女です。そなたの

ものにはなりませんよ。あれの胸にはある非道な男への消し難い恋の炎が燃えているのです。その者は何百里もの距離で隔てられているのですけれどね。あの娘は男のだまからかしの罫から逃げだす勇氣は持ち合わせていました。が、それにもかかわらずあれはその男を愛し続けていて、ある修道院に閉じ籠り、他の者の愛を受け入れることができぬまま、不幸な星回りに涙しています」。

フリートベルトはゾエの家族史のこの断章に大いに驚愕したふりをしたが、恋人の居場所を教えられたのを内心ひそかに喜んだ。それにも増して嬉しかったのは、母親の口ずから、至らぬこの身を姫君が愛してくれている、という信頼すべき証言をもらったことである。早速隠し立てしない奥方に愛娘の奇妙な恋の顛末を問い始めると、相手は騎士が表向き示した好奇心を満足させようと、こんな一種の噓話をしたのだが、こちらにはその本当の意味を穿鑿するのに大して苦勞は要らなかつた。

「カリステは」と彼女は言つた。「ある宵のこと姉たちとうちつれて海岸を散策しておりました。姉たちは軽はずみにもこの母の住まいを囲む堅固な壁の外のこれまで行つたことのない所を訪れようとしたのです。弓なりの岸辺の丘の陰に一隻の海賊船が錨を下ろしてしまつてね、のんきな娘たちが何の危険も感じないと、繁みから一人の賊が躍り出て、怯えるあの子に追いつき、脚の速い姉たちは逃げおきましたが、その間に腕に抱えて船に運び込み、自分の故郷へ連れて行つてしまつたのです。海賊は甘い言葉の限りを尽くしてあの子の歛心を買おうと努め、うまうまと取り入りました。娘は家柄の体面を忘れ去り、すんでのことこの奸知に長けた男と永久の契りを固めようとしたのです。そうした折り、ありがたことに風が一艘の小舟を浜に吹き寄せました。娘は祖国と自分のために泣いている母のことを思い出し、分別の声に従い、この機会を利用して囚われの身から自由になりました。けれどすでにあれの心を支配してしまつた抗うことのできない熱愛が海山越えてついでまいり、胸に深い苦しみを刻み、青春の喜び

を悉皆^{しつぱい}追い出したのです。娘の窆^{つと}れる一方の瞳のはかない輝きが消え、暗い憂愁があれをお墓と結ばせるのも間近でしょう。あの子が新婚の聞^{きこ}として選んだお墓とね」。

「それでは」とフリートベルト。「あの方の墓所を私の墓といたしましたしませう。我とわが手で命を断ちます。美しいカリスト様とともに死ぬのをだれに邪魔させるものか。なにとぞ一つだけご厚情を賜りますよう。私の亡骸をあの方の隣に埋葬して戴きたいのです。さすれば私の陰が姫君の奥津城をご守護いたします。けれどもその前に、カリスト様こそわが心の君との告白をあの方に申し上げ、この指環を私の誠の証^{あかし}としてお渡しいたして、せめてもの慰めとすることをお許しください。そうすれば私はおのれの誓いから解放されます。奥方様はこれを遺産として受け継がれればよろしいでしょう」。

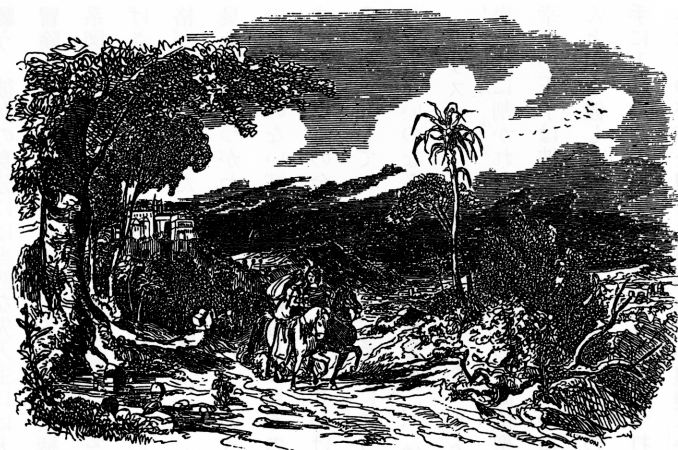
聞く者の胸を張り裂けさせるような若い騎士のこうした愛の吐露に、ゾエは母として心を打たれ、せきあげる涙をこらえることができなかつたし、同時に指環を至極大事に思っていたので、騎士の願いをすげなく拒みたくはなかつた。ただ姫が目下の心境ではこうした危なっかしい贈り物を受け取る気分にはどうもならないのでは、と心配した。しかしこちらは、こういった騎士らしい雅びな行爲は、ご婦人がたが自分の以前の交情の不可侵性をどれほど厳しく考えていようと、これに背馳するものではない、と奥方を説得することに成功した。そこで彼女は相手の懇望に同意して、悲しみに昏れるカリストとの面接を持参人に認可するように、との正教会修道院^{アールヒェンツドリック}総長宛ての指示書を渡した。フリートベルトは早晩鞍上の人となつた。恋しい女^{ひと}が自分をどう迎えるか間もなく分かる、と希望と懷疑が黒馬に拍車をかける。もつともさしあたっては、すべての状況から推して面紗盗みを許してくれている、とは思われたが。心臓をどきどきさせながら清らかな僧房に足を踏み入れると、姫は入口から離れた長椅子の上に座っていた。彼女の生まれながらの捲き毛は両肩をおおって垂れ下がり、青い布紐^{リボン}で好い加減に縛つてあるだけ。そのうつろな眼差しと表



情は深い苦悩をあらわにしている様子。そして白鳥のように真つ白な腕に頭をもたせかけ、到着者にろくに注意を向けぬ。が、その男が不意にひざまずいたので、これは母上の朝のご挨拶とか、ただの安否のお尋ねとかや、もつと大事な使いかも知れないと考え、優しい目を開いたところ、脚元にひれ伏しているよそものがだれか、はたと気づいた。仰天したあまり彼女は思わず知らず激しく動揺、身の危険を感じて逃げようとする鹿のように、ぱっと跳び上がった。彼はそのたおやかな手を熱愛こめて握り締める。けれど姫の方は憤然とした態度で相手を突き放した。

「出ていって、この嘘つき」と彼女。「一度私を騙しただけで十分でしょう。またわが身に泥棒など働かせませんからね」。

こうした攻撃で迎えられることをよくよく覚悟していたフリートベルトはためらうことなく、惚れたがためにした自分の悪戯を、恋する者にはつきものの説得力で、美しいカリステにひたすら弁明した。これがしかるべき序曲になるだろう、と思いつながら。さて、このいさかいが単なる面紗盗みより大事な問題に関わっていると仮定するならば、ちなみに両者が主要な点で合意に達している場合、限らない愛のせいで行く。盗みを言い繕うための論拠の数々が彼女の心に受人られたと見て取ると、これでもうカリステは戸口からも窓からも逃げだすことはあるまい、とフリートベルトは安心した。シュヴァーベンからキラダス諸島まで



彼女を追って来た、という彼の誠実さの明白な証拠と、この恋人は世界の果てまで探しに行ったことだろう、との彼女の確信が、とうとう完全な赦免をかちとってくれた。姫は彼に愛の告白をし、生涯彼と苦楽を分かち、との誓いを立てたのである。

艱難辛苦のあげくによく手にした勝利に、念願叶ったフリートベルトは有頂天。おのれの幸福がどれほどのものかまるきり見当もつかぬ。彼は歓喜に酔い痴れて恋人を同伴、母公の宮殿へと急いで戻った。ゾエは、鬱々としていたカリストエが人間社会から孤絶して青春を悲しみのうちに送ろうという決心をかなぐり捨て、もはや憂いの影も見えぬ晴々とした顔で自室に入ってきたので、このうえもなく驚いた。フリートベルトは危うく、またしても妖術を使ったとの嫌疑を掛けられるところ。ことに相思相愛の二人の口から、不可分の合併を決めた仮条約が締結されたも同然、と母君が聞いたのではね。というのも、心の君である姫に指環を渡すという遍歴の騎士の誓言が、実は姫の心に逆鱗さかひねを漕がせるのが目的とはと思ひ掛けなかったからで。なにしろ奥方にしてみれば、姫の心は以前の有資格者がすでに入手しており、その者が獲得した利権（訳注）の徴しるしとして自己の所有地にあるかのごとく竈かまどに火を点けた、と推量していたのでなおさらだったしだい。さて、おしなべてフリートベルトは奥方のお気に入りだったが、こうした寵愛も、同等の高貴な血統を、と

願う、彼女の身分には当然な先入主には大して影響力はない。そこで正式に結婚の許しをあたえる前に、彼女はこの冒険企業家に対し、系図による貴族の家柄証明をするよう要求。さてナクソスにはそこいらじゅうと言ってよいほど系図作りがあり、こうした繁文縟礼はなぶんじゆれいに必要なだけ長くも幅もある金城鉄壁の血統図を、この連中の工房でつちあげさせるのはフリートベルトには苦もないことだったが、彼はつらつら考えて、自分には錚々たる一族に参入する資格がある、とした。その証は愛なのだ、と。彼の言葉を借りれば、愛は似た者同士を結ばせたがるもの。鴉を驚と、梟を駝鳥とつがわせたりはしない。そのうえ彼は佩剣を示してこう言った。これこそ私の生まれが誉れ高いことの非の打ち所のない証人、何人に対してもそのことを喜んで主張してくれましようぞ、と。この論拠の妥当性にゾエはまったく反論の余地がなかった。とりわけ、美しいカリストに潤いのある情緒を回復してくれたのはこの異国人である、と承知していたことだし。それにこういう場合聡明な母親の取る道は、貴重な家庭内の平和をことさら乱すつもりでもないのなら、愛娘の選択を肯い、娘の色恋に容喙する母親の権利をことごとく完全に捨て去る以外にない。

カリストは、誠実なフリートベルトはシュヴァーベンの四分領大守だ、と断言した。これはローマ法王が異教徒に割かれた土地の司教たちや高位聖職者らを選ぶのと同じ権限に倣ったわけ。こうして輝かしい称号を載いた幸運の王子は彼女を祭壇に導き、誓いの指環を嵌めた。そして姫は床入りの儀の翌日、これを待ち受ける母君にきちんと引き渡したのである。さて出来立ての四分領大守は義理の母となった奥方に、師父ベンノの遺言による相続権で手に入れたこの指環の来歴を包み隠さず打ち明け、これをしおにあの尊敬すべき隠修士の身の上を逐一物語った。ゾエはこの率直な報告に同様の虚心坦懐さで応え、指環を自分の手袋に巻いてわざとシュヴァーベンの洞に残したことを告白、さらに付け加えて、師父ベンノがこうした神聖文字の秘かな意味をまったく正確に解読したのであり、池への訪問を二度としないなどというつもりは自分には毛頭なかったのだが、事のしだいがそのときの道連れれの

一人だったお喋りの従姉妹の口から横暴な夫に洩れてしまい、怒り心頭に発した夫はすぐさま面紗を奪い取り、このすばらしい自然の賜物を憤激に駆られてずたずたに引き裂いたため、妖精の泉での沐浴に戻ることはできなくなつたのだ、と言つた。隠者が誠実にじつと待ち続けてくれたと聞いて奥方は大いに悦び、善良なベンノを優しく偲んでそれに報いた。こうして婚殿の物語から、面紗を盗むよう仕向けたのはベンノで、その行為がもちろんフリートベルトの幸せに繋がつたのだ、ということが明らかになつたので、それだけ一層容易に彼は気のいい奥方から完全な赦しがもらえた。それから彼が敬愛する師父によく仕えたことで、奥方は没るまでシェヴァーベンの婚を大切に思つた。

フリートベルトはいつも若々しい妻とともに結婚の幸せを満喫して暮らした。今日こうしたことにお目に掛かれるのは、結婚という茨の繁みを薔薇の園と思ひ描くのが常の甘美な理想の熱愛でだけ。ただカリステが残念でならないのは、奇跡の沐浴というすばらしい特権を背の君に同じように分けてあげられないこと。なにしろ二十五年後ともに銀婚式を祝つた折り、夫の褐色の捲き毛が色褪せ、丘陵や山岳の初雪が冬の到来を告げるときのように、先端が白銀色に染まつていたから。これに反し美しいカリステは相変わらずこのうえなく麗しい春の弥生に咲き匂う薔薇の花にさも似たりだつた。

この優しい夫婦めおとの幸せな契りが、その後冬と春とが一緒になつたときでも、厳然として続いたかどうか、言い伝えは何も語っていない。あるいは、これら対立する二つの季節が闘う際見られる自然界の普通の成り行き通り、穏やかな日差しと嵐や吹雪が交代で訪れたかも。けれど噂が信ずるに足るとすれば、リヨンのご婦人方があの気球乗りたちをはなはだ鼻直し、気体静力学の実験のための公債募集にきわめて熱心に応募した理由は、（注1）ただただ、遠く離れた美の泉への旅を迅速かつ快適におこなうために、輸送船などより気球というすばらしい発明を利用したい、そして、ピラストル・ド・ロジェ殿が舵かじを取ることを承諾してくれるなら、血統上の恵みがあるかもと期待しつつ泉の靈験を試

してみたい、と、まあこれに尽きたそうなの。

原注

(一)

(1) シュヴァーネンフェルト(白鳥ヶ原) ツヴィカウ近郊の懐に楽しい土地。今日でもなおこの名前で呼ばれる。ある古伝説によれば、この名はヒルデイスとかいう白鳥乙女にちなんだとのこと。町の名もその乙女の父キグヌス(Kignus) (訳者補足)「キグヌス」はラテン語で白鳥の意。ツヴィカウがこれに由来するというのは民間語源学から来ているようだ。父も娘も妖精族に属し、どうやらレダ(訳者補足)ギリシヤ神話の、白鳥の姿に化けたゼウスを愛撫しているうち、その子を宿したスパルタ王の妃。(二) 訳注(21) 参照。卵の卵の一つの後裔らしい。

(2) マイセン軍は……六十の六十倍も短した グラーファイ(訳者補足)未詳のザクセン史の眼目である。勝利側が撃滅された敵兵を雲雀のように六十を単位として数えたというのは、もしかすると、辺境伯の麾下にあつたライプツィヒの市民兵が、この戦役を網で雲雀を捕らえる猟に譬えたのに基づくのかも知れない。勝利はそれほど彼らにとつてたやすかつたので。

(3) 事が済むと……練り歩いた この挿話を記しているのはやはりグラーファイ。

訳注

(1) ツヴィカウ ザクセンの町。エルツゲビルゲ盆地にある。市の紋章は、四分された楯の左上・右下にそれぞれ三羽の白鳥、右上・左下にそれぞれ(ムルデ)河に臨む三つの塔が描かれている。「シュヴァーネンタイヒ」(白鳥ヶ池)を中心とする市の公園がある。ハレからボヘミアへ通じる交易路の一つに位置していたため、十二世紀初頭頃急激に勃興。二二九〇—一三三三年神聖ローマ帝国直轄都市。

(2) ビルモン ト ハノーファー近くの鉱泉。炭酸泉。

(3) カールスバート チェコのカルロヴィ・バリ。アルカリ芒硝温泉で名高い保養地。主泉は七三度の熱湯を間歇的に八一—一〇メートルの高さに噴き上げる。伝説によれば神聖ローマ帝国皇帝カール四世が鹿狩りの折り一三四七年に発見したとのこと。彼はここで病気を癒した。マリ・ア・テレジアの愛顧も享けた。

(4) スパア ベルギーの温泉。十八世紀にはヨーロッパの保養地のなかでも最も名高かつた。

(5) ビサの王の浴泉 もとよりビサはイタリアのトスカーナ地方の有名な古都だが、「王の浴泉」は未詳。どなたかご高教を。

(6) 謎めいたサンテ・マール 拙訳「ローラントの従士たち」(武蔵大学人文学会雑誌第三二巻第四号所載)の注(その志)(18)参照。サン・ジェルマン伯爵などとも名乗る。近世ヨーロッパの法師の一人。

- (7) ポンバドゥール夫人 ジャネット・アントニア・ポアツソン。ポンバドゥールの女侯爵、のち女公爵(一七二二—一七六四)。ルイ十五世の愛妾。
- (8) 昔むかしのナホルの女たちのように 旧約聖書「創世記」第二十四章参照。カナンの地で豊かになったアブラハムは、息子イサクの妻には自分の故郷の娘を娶りたいと考える。彼の意を帯した老僕は、アラム・ナハライムのナホルの町へ赴く。ナホルの町外れの井戸に水を汲みに来た女たちのなかから、条件に叶った乙女がみつかる。アブラハムの兄弟ナホルの孫リベカである。
- (9) 王家の相貌 ラヴァーター(スイスの神学者ヨハン・カスパー・ラヴァーター)の「人相学に関する諸断章」に人相学的に読み取れる崇高な性格の記事がある。ラヴァーターとムゼーウスの関係、前者のこの著書に対する後者の皮肉な攻撃については、前掲「ローラントの従士たち」の注(その志)(12)を参照されたい。
- (10) マイセンの名高い敬虔な司教 マイセンの聖ベンノ(一〇一〇—一〇七〇)。ヴェンド族(ドイツ東部から東部アルプスにかけて居住したスラヴ系民族の総称)にキリスト教を伝道したとされる。一五三三年聖徒に列せられた。
- (11) アペラール のちの有名な神学者アペラルドゥス(一〇七九—一四二二)は家庭教師を頼まれた少女ヘロイザを誘惑、妊娠させたあげく、修道院に入ってしまった。彼は少女の保護者である激怒した伯父に雇われた者たちの手により去勢された。マーク・トウェインもいみじくも協賛している(「赤毛布外遊記」)ように、さまざまある、である。両人が修道院に入ったあと取り交わした文通のため、彼らは十七世紀、十八世紀に全ての感傷的な恋人同士の理想像になった。ジャン・ジャック・ルソーはその有名な小説「新エロイーズ」(La nouvelle Héloïse)のタイトルでアペラールとエロイーズの思い出を更に強めた。ふふん。
- (12) 守護聖人 誕生の日、もしくは命にちなみ人間を守護してくれる聖人(カトリック)。
- (13) 辺境伯フリードリヒ 一四二三年から一四二五までマイセンはドイツの辺境伯領の一つだった。のちザクセン選帝侯領に属す。大胆伯フリードリヒ(注(16)参照)はこの辺境伯領の領主。
- (14) 皇帝アルベルト 神聖ローマ帝国皇帝ハプスブルク家出身のアルブレヒト一世(一二五〇—一三〇八)を指す。ルドルフ・フォン・ハプスブルクの長子。一二八三年オーストリアを継承、一二九八年アドルフ・フォン・ナッサウの後を襲いドイツ王となり、諸君主を服従させるが、王権の拡大には利あらず、また、遺産であるシュヴァーベンの諸領土をあたえないでいた弟ルドルフの息子ヨハンとその共謀者たちの手にかかり、ハプスブルク家の人々の面前でロイス湖畔で弑逆された。
- (15) オスターラント 昔の北テューリンゲンの辺境州の名称。大体かつてのザクセン・アルテンブルク自由邦と思えばよい。
- (16) ルッカ近郊 大胆伯フリードリヒ(Friedrich der Feindig)とその弟デーリッツマン(一二六〇—一三〇七)は惨憺な会戦でアルブレヒト一世をテューリンゲンの町ルッカとアルテンブルク近郊で打ち破った。一三〇七年五月三十一日のこと。

(17) ミディアン人の走り手 旧約聖書「士師記」七章十九節以降の記事によれば、イスラエルの勇者ギデオンは、侵攻してきた東方の諸民族ミディアン人らの大軍に三百人の手勢で夜襲を掛け、これを潰走させた。

(18) パン焼き籠 中世ドイツでは村の各戸にパン焼き籠があったのではなく、共同使用だった。これは領主の所有で、使用料が徴収された。

(19) 七人の眠れる男 キリスト教の聖者。デキウス皇帝の七人の召使で、キリスト教が迫害された時代追手を逃れて二五一年エフェソスのある洞窟に隠れた。ここで寝入ってしまい、目を覚ましたのは四四六年で、すでにキリスト教は国教となっていた。

(20) 酒神の祭儀の狂気が……振るわせる パッコス(デュオニソス)の祭儀の祈りの熱狂と興奮は激しいもので、とりわけ女性の信徒にそれはなほはだしかつた、という。彼女らは山野を駆け回り、手に杖を携え、夜は炬火をかざし、叫び、乱舞する。そして、しばしば動物や、時には小児さえも襲って捕らえ、引き裂いてその肉を喰らったとのこと。エウリピデスの悲劇「パッカイ」(ディオニソスの信女たち)はすさまじい。

原注

(1) 嘴くちばしの黄色いうちは女連には高く買ってもらえない この点今日においては、周知のごとく趣味嗜好はまことに著しく変化、若い諸君に有利になつている。

(2) この廢墟は……パッコスが祀られていたのだ トウルネフオール(訳者補足→フランスの旅行家ジョゼフ・ピトン・ド・トウルネフオール(一六五六一一七〇八)は「王命により行われた近東旅行見聞録」(Joseph Piton de Tournefort: Relation d'un voyage du Levant, fait par ordre du Roy) 一巻・一七七一七一を著した。ドイツ語への翻訳は一七七六年)の証言によれば、神殿の門はまた現存。葡萄酒がいくつかの決まった酒槽さかに流し込まれるのを常とした何本もの溝も見られるそう。

(3) 既知の三つの大陸 ベンノ神父が生きていた時代には旧世界の三つの部分しか知られておらず、四番目はまだ発見されていなかった。

訳注

(1) テオスの老人 テオスはテオスの誤り。紀元前六世紀のギリシャの叙情詩人アナクレオンを指す。イオニアのテオスに前五五〇年頃生れた。サモスの王ポリクラーテスの宮廷に仕え、その死後アテネのヒッパルコスのもとで暮らし、八十五歳で乾葡萄酒を喉に詰まらせて窒息死した、という。彼の酒と恋を唱った詩は僅かな断片しか残っていない。いわゆるアナクレオンアナクレオンの調べは、アナクレオンの手になるものではなく、後代、たいていは恐らく紀元五世紀のものと思われるが、これら人生の享樂をことほいだ六十の詩は、近世の叙情詩にたびたび模倣された。

(2) ヴァイセヴァイセ御大 劇作家、オペレッタ作家、児童文学作家フェーリクス・ヴァイセ(一七二一—一八〇四)は十八世紀にその楽しい歌と童歌の数々で広く江湖に記憶された。

- (3) ヘルヴェチア スイス。
- (4) キブルクの伯爵 キブルクはスイスのチューリヒ郡(カントン)にある小村。伯爵家はハルトマン・フォン・ディリンゲン伯爵を始祖とする。一二六四年断絶。
- (5) キサ 今日ナクソスと呼ばれる同名の島の首邑。
- (6) マルコ・サヌートの末裔 ヴェネチア人マルコ・サヌードは、一二二〇年他のキクラデス諸島とともにナクソス島を征服、皇帝ハインリヒによりナクソス公爵領の世襲君主に任ぜられた。サヌード家はもちろん一三六二年に断絶した。
- (7) 皇帝ハインリヒ シュヴァーベン出身の神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒと言えば、フリードリヒ二世の子のハインリヒ六世(在位一一九一—一九七)だが、それだと時代が合わない。
- (8) キクラデス諸島 エーゲ海南部、クレタ島北方に横たわる島嶼群。「小さい島々」の意。ナクソス、パロス、ミコノス、シロス、デロス、ティノスなど。
- (9) アペレス アレクサンドロス大王の時代のギリシャの画家。
- (10) ヘロディアスの娘 七つのヴェールの舞で知られるサロメのこと。
- (11) モレア ペロポネソス半島に対するヴェネチア人の呼び方。
- (12) 帝都 コンスタンティノポリスは一四五三年オスマン・トルコ軍により陥落するまで東ローマ帝国の首都。
- (13) テイトノス ギリシャの言い伝えによれば曝の女神エオスの恋人。女神は彼の端麗典雅な風貌に惹かれ、恋人とし、ゼウスに願って不死を授けてもらうが、同時に水劫の若さを頼むのを忘れた。エオスは彼を一室に閉じ込める。そこでテイトノスは際限も無くしゃべり続けたが、体は縮みに縮んで、とうとう声だけになってしまった。これが蟬の起源だと言う。
- (14) 牧童 トロイアの王子パリスを指す。ヘラ、アテナ、アフロディテの三女神のうちだれが最も美しいかの審判役にされたパリスは、世界で一番の美女を、というアフロディテの賄賂を受け、彼女に軍配を上げ、報酬としてスパルタ王メネラウスの妃ヘレナを受け取る。トロイア戦役の原因である。
- (15) アンキセスの殿 トロイアの君主アエネアスの父。愛の女神アフロディテの恋人だった。
- (16) 雄々しい戦神 ギリシャ神話の武神アレス。一般にアフロディテの夫とされる。
- (17) 動物精気 人体内を循環し、微妙な生命機能を営む物とかつて信じられた。
- (18) エジプトの暗黒 旧約聖書「出エジプト記」十章二十一—二十二節。エホバの命によりモーセがエジプトの地に召来した三日間の暗闇。エジプト人はその間お互いの姿を見ることも、居場所から立ち上がることもできなかった、という。

- (19) ヒエラ キクラデス諸島中最南の島サントリニ（古代はテラ）島の属島の一つ。火山活動によって紀元前一九七年にできた。現今の名は（バラエア）カイメニ。サントリニ島は極上の葡萄酒（赤白のマルヴァジーノ芳醇甘美酒）を産出する。
- (20) アルグスとブリアレウス ギリシャ神話の二人の巨人。前者は百の眼を、後者は百の腕を持つている。
- (21) レダの卵にまで遡る ギリシャ神話によれば、スパルタ王テュンダレウスの妃レダは、白鳥に化身して彼女を抱擁したゼウスに二つの卵を産み、これから（トイア戦役の原因となったといわれる）美女ヘレネと双子神（ディオスクロイ）カストルとポリュデウケスが孵化した、とされる。

(22) 葡萄酒の発明者 ノアを指す。旧約聖書「創世記」九章二十節以降に、ノアが農夫となり、葡萄酒を作り、葡萄酒を飲み、酔つて裸となつて寝ていた、とある。

(23) 永遠のユダヤ人 アハシユエロス。キリスト伝説の一つの主人公。エルサレムの靴屋。ゴルゴタの丘へと磔柱を背負つて歩むキリストがほんのしばらくその店先で休もうとしたとき、さつさと歩け、と罵り、そのため、私は今宵父なる神のもとに憩うことができるが、そなたは再臨の日まで放浪するのだ、と言われたユダヤ人。不老不死で、いかなる災害、疫病にも体を損なわれることはない。十六世紀以来ドイツを中心として広まった。フランスの大衆小説作家ウジェーヌ・シユウに「永遠のユダヤ人」がある他、文学の素材としてしばしば用いられる。大佛次郎「帰郷」でも言及される。

(三) 訳注

- (1) アクテオン 牧人アクテオンは狩りの女神アルテミスが沐浴するところをひそかに窺い、罰として牡鹿に変身させられ、彼自身の猟犬どもにずたずたに引き裂かれてしまふ。
- (2) サビニ人の女の略奪 牝狼に育てられた双子ロムルスとレムルスに纏わるローマ建国伝説の一つ。現在ローマの都がある場所に定住しようとしたローマ人は、女性と後継者となる若者たちが不足していたので、近くの先住民サビニ人を襲つて乙女たちをさらひ、これを妻とする。やがて奪い返して攻めて来たサビニ人の軍勢とローマ人の間に立ちふさがつたのは、すでに子供もでき、夫を愛するようになっていたサビニ人の女性たちだった。これは画題としても有名。両民族は合一して、ロムルスはサビニ人の王ティトゥス・タチウスと支配権を共有する。
- (3) アルパヌス聖人の祝日 デイオクレティアヌス皇帝の時代イギリスで殉教したとされる。その地は現在セント・オルバンズと呼ばれる。祝日は六月二十二日。夏至は通常このころ。

(四) 訳注

(1) インクレレとヤリコ 文人クリスティアン・フェルヒテゴット・ゲレルト(一七二一—一七六九)の『寓話の物語』(Christian Fehrengott Gelert: Fabeln und Erzählungen)所収の、当時人気があった物語の恋人同士。難破したインクレレはインディアンから逃げる途中土着民の乙女ヤリコに出会う。彼らはお互いに惹かれる気持ちを目と表情と身振りて告白する。

(2) 至福の野(ユツトイ) ギリシヤ神話によれば、世界の西の果ての大海オケアノスのほとりにおいて、神々に選ばれた英雄たちが不死の生活を営む野。

〔五〕

原注

(1) ビオンデッタ 物語文庫(die Bibliothek der Romanen) 第四部および続く部の『愛の神と呼ばれた悪魔』(Teufel Amor genannt)なるお伽話を参照されたい。(訳者補足→フランス人のジャック・カゾット(一七二七—一九二二)の『愛の悪魔』Jacques Cazotte: Le Diable amoureux. 一七七二)というお伽話風小説では、悪魔がビオンデッタという美少女に化けて、あるスペインの貴族を誘惑しようと試みる。この小説はハイムリヒ・アウグスト・オットカール・ライヒャルトの『物語文庫』(二十一巻、一七七八—一九四)の第四巻、第五巻に『愛の悪魔』というタイトルで収録された(『Teufel Amor』 Heinrich August Otter Reichard: Bibliothek der Romane)。

訳注

- (1) プーフホルン銅貨 フリードリヒスハーフェンで鑄造された補助貨幣。
- (2) シヤルマイ 中世の木管楽器。オーボエの前身。
- (3) シヤヴァーベンのとんちき Schwabenstreich 軽率な愚行。もとより他地方の人間の揶揄だが、民間伝承に登場するシユヴァーベンはそういう行動をすることになっている。たとえばグリムの『子どもと家庭のための昔話集』一一九番(KHM Nr. 119 Die sieben Schwaben)「シユヴァーベン七人男」を参照されたい。
- (4) ラインの瀑布 ライン上流スイスとドイツの国境辺り、シヤフハウゼン近傍でライン河は(こう)こうと轟く急湍となる。
- (5) 狂えるオルランド イタリアの文人アリオストの長詩『狂えるオルランド』(Ludovico Ariosto: Orlando furioso. 1516)の主人公。恋に破れて狂乱する。
- (6) ファウスト博士がコルネリウス・アグリツパ……黒犬が一匹足りないだけ。悪魔は黒犬の姿でファウスト博士やコルネリウス・アグリツパ・フォン・ネットスハイム(Cornelius Agrippa von Nettesheim (1486-1535))に仕えたという。この二人の医師にして錬金術師の生涯にはその存命中から既に伝説めいた尾鰭が付け加えられた。両者とも悪魔と契約を結んだとされる。
- (7) あのバリの気球乗りたち……当時の大センセーション、一七八三年十月十五日におこなわれた人類初の気球の上昇を指す。この時ジャン・フランソワ・ピラストル・ド・ロジェ(一七五六一—一八五)が、モンゴルフィエ兄弟作成の気球の一つを発進させるのに成功。ピラストル・ド・ロ

ジエは二年後、この気球でブローニーユから英国に飛行する実験には失敗した。

- (8) 空飛ぶ悪兵隊の方が……抑止効果を挙げる 英仏海峡を挟んで両国の間には密輸が大いに盛んにおこなわれ、人手も足りず、道の悪い陸地を馬で行く税関の沿岸監視官や少数の密輸監視船には到底これを防ぐことはできなかった。英国下院が禁止令を頻繁に出しても遵守されず、物笑いの種だったようである。英国沿岸の有力者たちも直接・間接に密輸業に手を染めていた、この話もある。これを取り締まるのに、気球はもってこい、だともゼーウスは説いているわけ。天から滌青と硫黄を降らせる、云々は、旧約聖書「創世記」十九章二十三節にあるような、ソドムとゴモラに対する神の懲罰のイメージであろう。なお、「悪兵隊」はフランスの騎馬悪兵隊。

(六)

原注

(1) リヨンのご婦人方は……とても熱心に応募した 世間の新聞の報道による。

訳注

- (1) ロレットの聖母マリア イタリアのレ・マルケ地方のロレットのマリア像。伝説によれば一二九一年天使たちによってロレットに運ばれて来たナザレのマリアの生家であるカサ・サンタ(聖なる家)に、古い——今日では火事で焼けてしまった——マリア像が安置されて信徒たちに礼拝され、カトリックの習わしに従い、豪華な衣服や装身具で飾られていた。

- (2) 女神の代わりに雲 ギリシャ神話によれば、北部テッサリアの住民ラビタイの王の息子イクシオンは女神ヘラに惚れてしまった。ヘラの夫大神ゼウスは女神自身の代わりに雲でこしらえた似姿を抱擁させ、さらに(そうした僧上沙汰の)罰として、決して停止しない炎の車輪に縛りつけて、車輿めの刑に処するように命じた。

- (3) その獲得した権利の徴として……火を点けた 中世パン焼き籠の所有権は本来その土地の領主にあつて、領民は使用料を支払ってパンや菓子を焼いた。ここでは、恋人の心を我が物にし、それに恋の炎を燃やしつけた、ということをも、領主にパン焼き籠の利権を授かり、自分の物のようにこれに点火した、と譬えている。

- (4) 四分領大守 ある国を分割支配する四人の領主の一人。古代ユダヤなどにあつた。

- (5) 異教徒に割かれた土地 いわゆる聖地その他がイスラム教徒の手に渡つたあとも、これらの土地の高位聖職者が法王により任命されていたが、そうした名誉職の司教たちはイン・パルティプス(異教徒の土地)の司教と呼ばれた。たとえば「コリントの大司教」。こうした称号は一八八二年になつてようやく廃止された。

- (6) ビラストル・ド・ロジェ (五) 訳注(一)参照。ただしこの原文では、「ビラストル」ではなく「ピラトル」となっている他、Herr Platte von Rozierとドイツ語表記となっている。

解説

(一) タイトルについて

この翻訳は Johann Karl August Musäus: Der geraubte Schleier (oder das Märchen la Montgortier) の全訳である。副題は、このお伽話が出版された一七八四年の大ニュース、ヨゼフ・ミシエル・モンゴルフィエ(一七四〇—一八一〇)とジャック・ティエンス・モンゴルフィエ(一七四五—一七九九)兄弟によって熱氣球が発明され、第一回実験がおこなわれたことへの小味の利いたお愛想であろう。なお訳注(五)(7)、(六)(5)をも参照のこと。

なお、(一) (六) と、読み易くする便宜上六章に分割したのは訳者の責任である。原文は全然分かれていない。

(二) 素材について

原型となった民話のテール・タイプは、アールネ・トンブソンの分類によれば、A T 四〇〇「失踪した妻を捜す男」および四六五 A「未知のもの探究」。「白鳥乙女」のモティーフに限れば、トンブソンのモティーフ・インデックスの D 三六一・一「白鳥乙女」となる。A T 三一一「婿の逃走を助ける女」型の話の発端が白鳥乙女であることもある(この場合主人公の若者は沐浴する乙女から白鳥となる衣を奪うが、持ち主にこれを返す代わりに結婚してくれ、と頼み、承諾される。二人して乙女の親のもとに行くと、親は婿となる主人公に難題を課す。乙女の援助でこれを解決するが、最後に若い二人は親元を逃げ出す。親はこれを追跡、ここからは呪術逃走譚のモティーフとなる)が、ムゼーウスのこの物語は、奪われていた鳥となる衣を乙女が発見し、これを纏って故郷へ逃げたのを、男が探しに出るのが主眼なので、まさに A T 四〇〇の方である。

グリムの「子どもと家庭のための昔話集」(Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm)にある類話は、KHM Nr. 193 Der Trommler(金田鬼一訳・岩波書店刊「完訳グリム童話集」二二六番「たいこたたき」)である。もともと、鳥となる衣装ということとは強調されていないので、ちと分かりにくい。また、主人公の太鼓叩きは、美女のものとは知らず、なんとなく衣装を拾い、美女が、返して欲しい、と懇願すると、あっさり返却する。この辺り、天晴れ児童向きな改作で、元の素材さに欠けるようだ。なお、このメルヒェンは、「白鳥乙女」型と、魔法の難題が恋人の援助で解決される話(KHM Nr. 51 Der Fundevogel || 金田訳五六番「めつけ鳥」)、および花嫁が忘れられてしまう話(KHM Nr. 113 Die beiden Kungskinner || 金田訳一二七番「王さまの子どもふたり」といった、異なったメルヒェンの結合である。

Hrsg. v. Paul Zauert: Deutsche Märchen seit Grimm. 1912/22 Die Märchen der Weltliteratur. Eugen Diederichs Verlag. 1976. Nr. 11 Der Jäger und die Schwanjungfrau. (P・ツァウネルト「グリム以降のドイツ昔話」十二番「獵師と白鳥乙女」)はこれに当たる。よく纏まった楽しい話である。人文学会雑誌の杉田教授記念号に続く次号に訳・注・解説を掲載するつもりで用意したが、これは発刊見送りとなったので、繰り上げてこの号の前、第三十二巻第二・三号合併号に載せた。後先が逆なので、ご参考までに事情を付記しておく。

ムゼーウスは冒頭をツウィカウの地方伝説に結びつけたが、この町の年代記に拠る所があるようだ。後は一転、遠いキラダス諸島に舞台が移る

が、白鳥乙女の故郷は普通極めて遠く離れた国に設定されているので、もつともなことだし、レダの産んだ卵の子孫云々は、いかにもムゼーウス流の教養あるおふざげのこと、と納得が行く。

しかし、記載昔話、ないし口承昔話のいつの時代かの文人による文学化のうち、この話型の最大の傑作は「千夜一夜物語」中で「船乗りシンドバッド」と並ぶ大長編「バツソラーのハッサン」(「ハッサン・アル・バスリとワク・ワク諸島の物語」と私は思う。手元のバートン版(大場正史訳・新潮文庫)では第七百七十九夜から第八百三十一夜(前掲訳書十六・十七巻)に及ぶ。気宇壮大な舞台の広がりにはムゼーウスの比ではないし、魔神たちの大活躍も呪術逃走譚の傑作である。

なお、「ワクワク諸島」とはどこか、とバートンは考証している(十六巻巻末注九九)が、これがすこぶるおもしろい。二説に大別して、後者は、セイシエルズ諸島、マダガスカル、マラッカ、スンダまたはジャワ、中国、日本などに擬している、と紹介。オランダの学者デ・フーエ教授の「日本に関するアラビヤ文献」(De Goeg: Arabische Berichten over Japan/Ausserdam 1880)によれば、広東では日本は「ウォ・クウォク」(Wokwo)と呼ばれており、おそろくはコクタン(Kokutan)の転訛であろう、との説を披露する。もとより、これが「倭国」であることは現在事改めて述べるまでもないが、ティグリス、ユフラテスの河口から遼遠の東方へ伸びる海上の道の終点、日本がワク・ワク諸島だと仮託された、とすれば、私たちにほっとしお感慨深い。なるほど、中近東の人たちから見ても、日本ほど臚な神秘の国はそうそう無かつたことだろう。

主人公ハッサンが羽衣を奪って妻とした美女は、巧みに策略を設けて夫の留守中これを取り返し、間に設けた愛児二人を連れて故郷ワク・ワク諸島に戻るが、ここはバツソラーから船で三カ月も掛かる国から、さらに七つの谷、七つの海、七つの巨岳を越えねばならず、勇猛果敢な女人軍や魔神や猛獣がおそろしくたくさんいる七つの島々である。ハッサンはその秀麗な美貌とひたすらな恋心が幸いし、魔族や、賢人、女人軍の司令官などに援助され、同王国の大王の七人目の姫君である妻と再会、子どもも連れて、強大な追手を退け、年老いた母のもとに帰る。

なお、白鳥乙女のモティーフについて、バートンは前掲書注七六で詳しく言及している。更には新潮文庫十二巻三〇五ページ原注一〇を参照すべきである。

日本のこのモティーフの説話では「近江風土記」が代表的。

拙訳ではあるが、これを畏敬する先輩であり、頼りになる同僚であり、親しい友人である杉田弘子教授の特任教授就任記念号(人文学会雑誌第三十二巻第四号)に寄稿することができて、まことに嬉しい。

(二〇〇一年一月九日 受理)